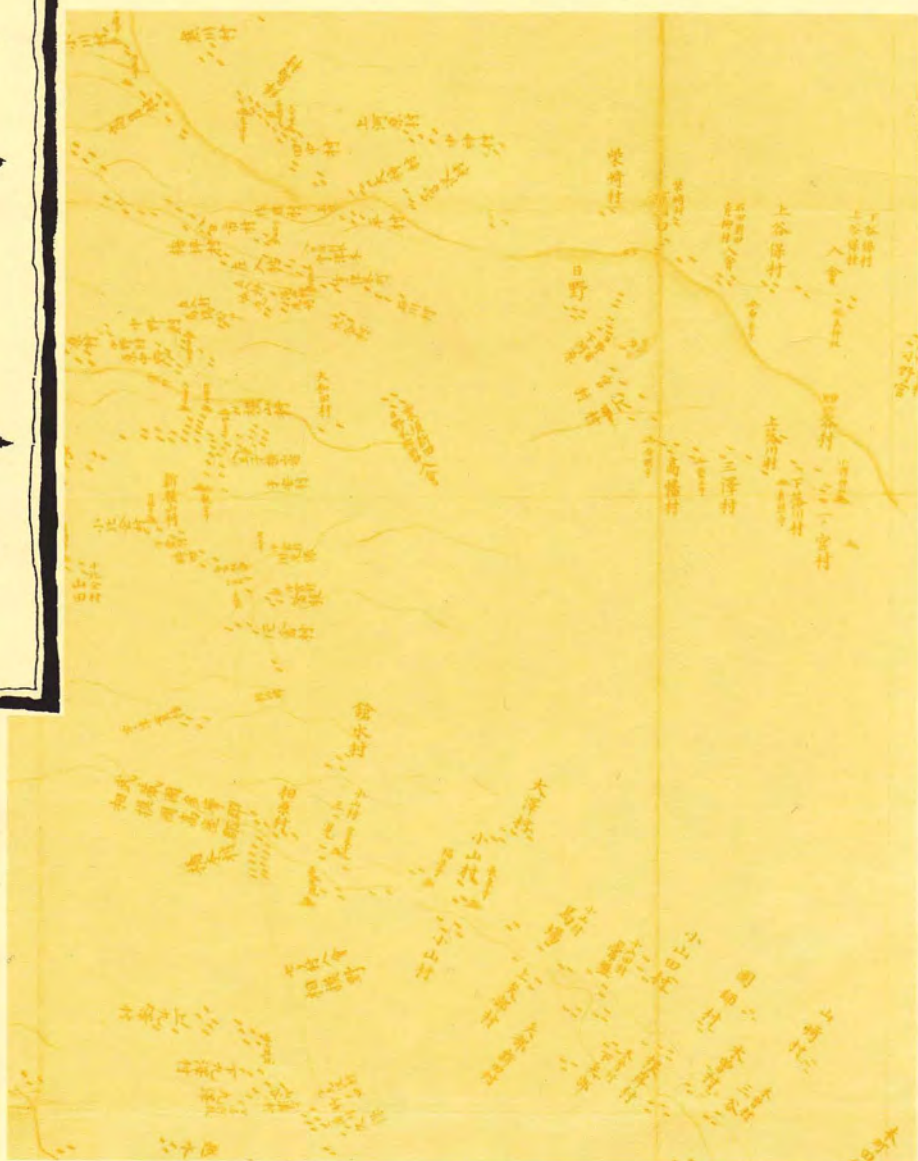


史料と伊能図

伊能忠敬

研究



二〇〇六年 第四三号

伊能忠敬研究会

表紙図解説

米国議会図書館蔵

伊能大図九〇号部分「八王子横山宿」付近

大図第九〇号は東部分に江戸があり、八王子付近は図の西端部分にある。甲州道中は九州第一次測量の帰途、南から八王子を抜けて北に向かう測線は老齢の忠敬が参加をとりやめた伊豆七島測量の帰途に、測られた。

西から八王子に入ると、千人同心の集住した千人町を北東に進み、右前方に曲がって、東西に延びる横山十五宿に至る。町並み約一里、多摩地域最大の宿場で、織物などの産業と物資の集散地でもあった。千人町や鍵の手をなす道筋は、この宿場が建設当初に帯びていた国境警備の役割を跡づけるものである。

日野から多摩川右岸の小野神社（現多摩市、聖蹟桜ヶ丘付近）、また高尾山薬王院（掲載図郭外）にも、手分けによる測線が延びる。拝島を北に向かう道は日光脇往還（測量日記では日光街道）で、松山、佐野を通り、日光まで四〇里（約一六〇km）日光火の番街道などとも呼ばれ、日光勤番を任務の一つとした千人同心の隊員が往復した。測量隊は熊谷まで測って中山道を南下、途中から荒川筋に入って川口経由で江戸に帰着する。

（題字は伊能忠敬の筆跡）

（鈴木純子）

目次 43号

特報『忠敬関係文書目録』完成間近 後世に遺る豊かな史料

新たな伊能家文書が九百余点

編集部 一

報道発表 伊能大図総覧と文書目録

編集部 四

話題 駿河台で伊能中図を探索―例会報告

前田 幸子 六

宗家文書が九州国立博物館に

編集部 一〇

戊も歩けば！地名尋ねて

齋藤 仁 一一

もうひとつの伊能図―忠誨星図―

荻原 哲夫 一二

新地域史料

三重を通った伊能忠敬測量隊

三重県史編集グループ編 一八

越後岩船測量―与惣左衛門覚書より（一）

風間 広吉 二六

新書炉辺談話

伊能図にみる国際性の試み

辻本 元博 三三

新発田の注連縄 大友正道

新年句 船形山 武川 芳男 三五

旧ホームページを終えて

大友 正道 三六

埼玉県下に忠敬さんの足跡を探す

加藤 巷児 三八

坂部貞兵衛と遣唐使遺跡

石川 清一 四〇

研究ノート

三浦半島に忠敬の足跡を歩く

白根 貞夫 四二

目録こぼればなし 阿蘭陀風説書・日晷扇

安藤由紀子 四九

良助の次男 榎本武揚（二）

伊藤 栄子 五六

伊能忠敬と久保木清淵との契（二）

佐久間達夫 六三

忠敬談話室だより

編集余話

編集部 六八

春は水戸へいらっしやい

川上 清 六九

つれづれなるままに「伊能図と鷹見泉石展」

山本 公之 七〇

日々の話題「文化の開拓者伊能忠敬翁」「大田区史探訪」

編集部 七一

お知らせ 旅行案内

編集部 七二

表紙図解説 鈴木純子

編集協力 伊能陽子 坂本嶺 前田幸子

特報

『忠敬関係文書目録』完成間近！

新たな伊能家文書が九百余点

後世に遺る豊かな史料が公開

伊能家に伝わる記録文書

昭和三十六年（一九六二）「伊能忠敬記念館」が落成し、佐原旧宅にあった主な忠敬遺品は記念館に寄贈された。旧宅にあった残りの品々は東京・世田谷の伊能洋さん宅に移された。伊能陽子さんによれば、これらは「残りの反古類」で納戸の隅に眠っていた。

時が過ぎ忠敬さん出番の時代を迎え、安藤さんと反古のしわを延ばし文字を読んできた。ようやく積年の思いは「目録にまとめられ、刊行の準備が進められている」。

安藤由紀子さん伊能陽子さん
お二人のお話から。戦時中洋さんは旧宅に疎開していた。安藤さんも

同様に疎開学童で二人は幼馴染の由。

二十年前、三郎右衛門家第十六代当主の洋さんの兄・伊能敬（たかし）さんから要請があつた。「是非忠敬の遺品はきちんと整理して後世に伝えたいので協力願いたい」。敬氏没後、永年にわたり宿題になっていた。

大きな行李に一杯の膨大な紙類をほぐし内容を見て分類整理を行い、そのうち種類別年代別に仕分けする。千葉県八千代市住いの安藤さんは東京を横断して世田谷まで通った。お二人の合言葉「老後の楽しみにね」の日々が続いた。

「苦笑いのちゅうけい先生に御詫びしつつ」後の人がこれ等を大切に保存していたことには、先祖への敬愛の心を感じながらの公開になる。

佐原市から香取市へ

今年三月、平成の大合併で佐原市は新市「香取市」になる。延び延びになっていた文書整理だがこれをひとつの区切りしようと、昨年来作業のピッチをあげ、この程完成まじかに至ったものである。お二人のこれまでのご努力は賞賛されよう。

九百余点の文化財

目録は「書簡」「書類」「近現代資料」の三部に分けて編集されている。その数は分類数で九百余点。枚数単位では二千枚に達する。資料はほとんどが未公開のもの。忠敬研究の資料であるとともに、近世近代から平成までの貴重な歴史資料とも言える。

「書簡」では忠敬目筆下書きを含め九〇人以上の発信者別に分けられ、日付、内容が摘記されている。総数は二九九通にもなる。

例えば

■足立左内（磨字者）から
大阪の麻田立達宛
（年始状写し）文化二二年
『文化二〇年春、松前留置のロシア

人ゴロウニン等との応接の次第報告
ロシア人達の人物評』

■江川太郎左衛門英毅（伊豆代官）
から忠敬宛 文化一四年
『地球全図御世話にて入手 至極鮮明にて、大悦 太陽運行観測について、御回答感謝』

■柴山伝左衛門（天文方手付下役）
から妙薫宛 文化一〇年

『作左衛門（景保）よりの伝言』三郎右衛門（景敬）殿死去の報、御用先への通知見合せ、大病の趣のみ通知の方、可なるべし』

■高橋重賢（函館奉行吟味役）から忠敬宛 文化五年

『年賀 間宮林蔵、エトロフ乱暴の節大骨折り 私方にて絵図作成中 ほどなくカラフト見分に出発 貴兄近年お下りの節は、林蔵配属させましたし』

■日亮（熊本、日蓮宗本妙寺住職）から忠敬宛 文化九年
『御依頼の当山蔵、朝鮮国礼曹司書簡の写し、御旅宿へ差出す』

これらの書簡は一九七三年刊行の「伊能忠敬書状（千葉県史料）」と一

三百通の書簡に江戸期の歴史史料が！

世間情報にアンテナ高く

忠敬自筆の遺言下書きも

昨年発行の当研究会編「伊能忠敬未公開書簡集」に続く現存文書の初公開であり、忠敬周辺にも及ぶ貴重なもの。

「書類」は「測量」「村」「家」に分類されている。

中分類「測量」では公文書類、測量・地図作成雑件、測量各地資料、天文・数学・その他草稿類、測量関係以外の公文書など四〇九件が詳細に。

例えばここでは

■達書 御目付羽太庄左衛門「達」

高橋作左衛門（至時）宛

寛政二年

伊能勘解由（忠敬）事、松平信濃守

（御書院番頭、蝦夷御用掛）宅寄合

へ、御差出しの事

■口上 天文方手付手伝坂部貞兵衛

伊能勘解由宛 文化七年

薩州家来よりの掛合書及び「是非とも種子嶋・屋久嶋渡海の所存」との当方返書下書き等差上げ

薩州二島へは、時候見計らい立戻りの上渡海との仰せ、承知

薩州島々測量年延の願書「病人続出測量差支えにつき、来年一先ず帰府」下書き

■貸出し地図覚書 文政四年 一綴 田口惣右衛門（寺社奉行水野左近将監忠邦家臣）へ

■日食観測記録（自筆） 数値一覽 文化四年

■彗星・恒星観測記録（伊能忠敬） 文政六年

■対馬国・豊後国・仙台領図・奥州図等貸出し地図一覽

■伊能勘解由（忠敬）事、松平信濃守（御書院番頭、蝦夷御用掛）宅寄合へ、御差出しの事

文政六年

彗星、招搖・魏・軒轅二の観測ほか、参考絵図、測量下図、測量下絵図など多数

中分類「村」で一件書類、支配、地図など九二件。

一件書類では「箱訴一件書類」「河岸問屋一件書類」が、支配では年貢、達書、願書、領主貸し金の記録が残されている。ここでの地図は佐原村及び佐原周辺の絵図、文間地図、田地測量図などである。

中分類「家」で扶持米・拝領屋敷、縁組・相続・墓・学問・著述・詩文、家事・家計など二三七件。ここでも貴重な資料があふれている。

■忠敬遺言下書き（自筆） 伊能三郎右衛門（景敬）宛 文化八年二月 上包一通

イ一、孝は義の根元 すべて質素に、将来は諸商売休み、貸し金も、地頭・村貸しは止めること

一、年々預け置き金の金子利息、妙薫（長女イネ・リテ（景敬妻）立会い、封金になさること

一、これまでの預け金八百両、その他他所等整理の上、兩人イネ・リテ（承知致させること）右、当家長久の用意なり

ロ「讓金」 伊能三治郎・鉄之助・妙薫・桜井秀藏・コト・神保氏・飯高吉太郎・中村表・中村東・久保木清洲・大川治兵衛・牧野観福寺・本宿組由緒百姓宛讓金のこと（上包に、「大切の書物」との注記あり）

（注・時期は九州）次出立前

■覚 伊能三郎右衛門（忠敬）証人大川治兵衛

伊能勘解由宛 文政四年 折紙一通

イ 金六百両、豊凶にかかわらず株式相求め、浮金にて窮民救済、飢略に致さること

ロ 八百両外地面等お譲り、大恩忘却せず、子孫に申継ぐ

伊能家の大英断！

貴重史料は伊能忠敬記念館へ一括寄贈

高木敬司氏に感謝 文化遺産伝承のモデルに

三人からの書簡など九一件。「書類」では明治期以降の忠敬遺品の取扱に関するもの、顕彰行事記録、出品目録、書籍・論文、雑件などに分類され一二点にのぼる。ここには今まで公開されている情報の発信資料そのものが多数含まれている。

【解説】は六八件の人物・事績を紹介。「忠敬年譜」では一七四五年の忠敬誕生から一九九八年（平成十年）新忠敬記念館竣工まで詳細に記録されている。

大英断の一括寄贈

これらの史料類は「伊能忠敬記念館」に近々寄贈される予定。すでに記念館には遺品が寄贈されており、これで記念館と伊能家に分かれていた品々がすべて揃うようになる。

学術的価値が高く、文化史的意義が深いものとして新たな文化財保護の指定が待たれる。

有徳の士高木敬司氏と記念館

一九八九年佐原市の高木敬司氏は新記念館基金として三億円を佐原市に寄付をした。これを基金に今の新記念館は一九九八年に竣工している。こうした篤志家の志が貴重な器になり、中身の収蔵物の拡充に繋がっている。今回の伊能家の緒史料一括寄贈も特筆すべき出来事であろう。

新しい文化遺産保存伝承のモデルに期待

歴史解説や伝承にはものの考え方、感性、広い視野での判断などに時代の風がある。散逸せずに伝えられる

貴重な遺産伝承のモデルとして世に広く伝えて行きたいものである。

後世への最大遺物に

こうした目録が文書として残されれば時が流れても、いつか伊能忠敬を知りたいあるいは知ろうと努力する人たちの目に止まるようになるだろう。史料は伊能忠敬記念館に保存されている。

これらの史料から新しい話題が次々生まれよう。史料公開の窓が広がり、新たな発見を喜びたいものである。

安藤さん、陽子さんに積年の「苦労に「何か思ひは」と言葉を向けると、お二人のふところの広さでしゅう「高木さんのお陰ですよ」とあっさりかわされた。まだ九合目とも。もう少し忙しい日が続きそうです。

なお、本誌は私家版で非売品を予定している。全国の主な図書館には寄贈するが、希望者への配布方法などは今後詰めていく。

（福田弘行）



左の二図は現在まで所蔵不明の絵地図。黒いところは赤、道の黄色、堀の緑など色彩が豊か。最後の一枚まで探求は続く。

報道発表「伊能大図総覧」「文書目録」刊行 編集部

二月十三日午後、東京神田の日本ウオーキング協会で開催されました。星野代表の司会で進行、渡辺名誉代表が説明。佐原から岩瀬市長、秋山教育長臨席のもと、佐原市に「文書目録」が贈呈され、佐原市からは感謝状が伊能さん安藤さん渡辺さんに渡されました。報道記事の一部を紹介します。これから話題が広がるようです。詳細は次号で。

伊能忠敬 足跡くっきり

日本地図の「総覧」試し刷り

江戸時代の測量家、伊能忠敬（一七四五―一八一八年）が作製した日本地図「伊能大図」二百十四枚すべてを初掲載する「伊能大図総覧」が十二月に刊行されることになり、監修する渡辺一郎・伊能忠敬研究会名誉代表が十三日、試し刷りを公表した。大図は、列島の地形を縮尺三万六千分の一で描き一枚が一畳の大きさ。総覧は約三分の一のB2判に縮小するが、約二百年前の海岸線や集落、城や寺社などの記述のほか、天文観測した地点を示す赤い星印もくっきり。実測の跡を示す赤い線は時折脇道にそれ、寺などに「寄り道」した様子もつかえる。

日本経済新聞 2月14日

江戸時代後期の地理学者、伊能忠敬が作製した大日本沿海輿地全図（一八二一年完成）のうち、最も縮尺率が小さい「大図」（3万6000分の1）全部14枚を収録した「伊能大図総覧」の出版が決まったと、伊能忠敬研究会（渡辺一郎・名誉代表）が13日、発表

発行を予定している「伊能大図総覧」の中の富士周辺の試し刷り



伊能大図

初の全図出版へ

した。2004年に「大図」の写しすべてが発見されて以来、採算性や技術的な問題から出版は困難とみられてきただけに、大きな注目を集めそうだ。

「奥地全図」は、忠敬が約15年かけて全国約3万5000キロを歩いて実測した、わが国初の正確な日本地図。収録される「大図」は、国内外で確認されているものから最も状態のよい資料を採用。米国議会図書館や国立国会図書館、松浦史料博物館（長崎県）など6か所から集められる。高解像度のデジタル撮影などで地図上の字を完全に判読できるようにするほか、彩色が退色している部分はできる限り原色に近づけるよう工夫している。

渡辺氏が監修し、編集は日本地図センター、印刷は日本写真印刷、発行は河出書房新社。原図を約3分の1に縮小したB2判二つ折りの体裁。全2巻計2冊2部。部数は300部で、予定価格は36万円。今年12月の刊行を目指している。

読売新聞 2月14日



会見会場 岩瀬佐原市長の挨拶



会場に並んだ大図試刷と寄贈史料



テレビ取材のひとこま



伊能陽子さん安藤さんから岩瀬市長に寄贈
文書目録を贈呈。報道陣からもっと笑顔で
と注文が入った。

駿河台で伊能中図を探求―例会報告―

前田 幸子

十一月十二日土曜日、今年度の例会が開催された。伊能忠敬生誕から二百六十年目にあたる今年の例会は生誕記念祭年にふさわしい内容でということで、柏木理事のご紹介により明治大学が所蔵する伊能中図を見学する「伊能中図探求会」として開催された。



ひさしぶりに「白雲たなびく駿河台」に足を運んだ。午前十時の集合時間に合わせてお茶の水の駅を下り歩いて行くと、歩道の植込みに大久保彦左衛門屋敷跡の標識が立っているのを見つけた。駿河台は彦左衛門ら駿河以来の旗本たちが住んだ高台なので駿河台と呼ばれるようになったのか。この高台から駿河の霊峰・富士山がよく見えるので旗本たちはこの土地をたいていそう気に入ったという。また駿河台は幕府天文方渋川春海の天文

台があった所でもある。ここからは夜空の星もよく見えたことであろう。そういえば、その渋川家に養子に入り天文方となった高橋景佑は高橋至時の次男で伊能測量隊の隊員「高橋善助」である。駿河台は意外に伊能図にご縁があるのかも、と江戸の昔をしのびつつ見上げれば、道の向う側に明治大学の新校舎。二十三階建の「リパティータワー」が聳え立っている。

かつての威厳ある旧校舎が超近代的な建築にすっかり様変わりしたのに驚きながら、新館入口に立つ伊能研究会の黄色の旗を目印に集合した。簡単な挨拶と案内のあと、すぐ見学会場である地下の図書館へと向かった。

奥まった小部屋に入ると中央のテーブルに五枚の古地図が広げられていた。明治大学図書館蘆田文庫所蔵の伊能中図である。

蘆田文庫とは歴史地理学者蘆田伊人が収集した古地図を主とするコレクションである。配られた資料（「蘆田文庫特別展」目録二〇〇四年十月〜十二月開催）を引用すると、「蘆田伊人（あしだこれと一八七七一〜一九六〇）氏は『大日本読史地図』や『大日本地誌体系』を編纂した歴史地理学者として高名ですが、夙に、世界図、北方図、日本図、地方図など、幅広い古地図の収集家としても知られています。なかでも地方図は、当該地域において失われてしまったものも多く、戦前から戦後にかけて、全国各地の史誌編纂担当者や郷土史家が同氏のもとに借覧を申し出ることがしばしばあり、同氏は快くそれに応じたばかりか、気軽に模写をも許し、調査・研究を支援したことが伝えられています」とある。また、蘆田氏の旧蔵書の多く、すなわち古地誌・地理書を中心とする図書約一、〇〇〇冊、古地図約二、〇〇〇点は明治大学図書館が一九五七年に購入され、図書館所蔵のコレクション



明治大学図書館にて

ンのうち外部からの利用依頼が最も多い資料という。これらの多数は現在、明治大学図書館のホームページで閲覧することができるということである。

さて、一同地図が並べられたテーブルを取り囲み、皆一様に体を折り曲げ地図に目を近づけて右へ左へ頭を動かし、見学した。ここに展示されている伊能忠敬の前記図録所載の解説を抜粋すると、

『伊能忠敬中図 第壹(中国四國)』伊能忠敬 手書(彩色) 1枚59.5×123.3cm「日本最初の実測による全国図」として名高い、伊能図と総称される伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」は縮尺によって大図(三万六千分の一)、中図(二十一万六千分の一)、小図(四十三万二千分の一)の三種類がある。本図は中図で、全八枚のうち、瀬戸内海を中心にした中国四國の部分である。

蘆田文庫では計五枚の中図(中国四國(本図)・中国四國・西國・九州・岐・肥前・五島・朝鮮)を所蔵しているが、これらは渡辺一郎氏によると、文政四年(一八二二)の最終版伊能中図を原図にして、大阪から長崎まで船の航行に関係する沿岸の地形と島嶼だけを描いたものである。沿岸部の形状がきわめて正確に表現されているのがよくわかる。明治期になると、伊能図を基にした日本全国図が続々と刊行された。中国・四國部分の伊能中図は珍しいといわれる」と書かれている。

伊能図の第一人者として本研究会渡辺名誉代表の解説が付されているのは当然と言わなければならないが、さすがであると感心した。

地図は美しいものであった。各国の地名をはじめ国界・郡界・城・神社・寺院・湊・陣屋など、様々な記号が書き込んである。「大阪か

ら長崎まで船の航行に關係する沿岸と島嶼だけを描いたもの」というだけあって、確かに船の航行に必要な地域に特化されている。

この伊能図は明確な用途を持っているのだ。これまで古地図とは領国の範圍や地勢を知るために作られたものという漠然とした考えで見えていたので、非常に新鮮に感じた。当時の防衛や交易に必要なだったのだろうか、日本だけでなく朝鮮の山々や島嶼まで書いてあり、「盜賊浦山」という面白い地名も見つけた。後日、測量日記でこの項を見ると、老岐を終えて対馬での日記に「遠見番所に登り、朝鮮山々ヲ測」とあって、これらの山は対馬から遠望したものとおわかった。ちなみに、この伊能図「九州老岐對馬」の解題には「朝鮮の遠景図あり」とちゃんと注記がついている。

しばし地図の鑑賞に集中し、熱氣が部屋にこもった頃、一隅から声が上った。テーブル上の五枚の伊能図の傍らに地図が入っていた袋が展示してあったが、それに上書きされていた文言を古文書解説の達人・伊藤栄子さんが読み上げたのだ。「(一一六)ノ内 西部半分ノ北部 伊能忠敬中図 五葉入 昭和八年七月 五十円ニテ買入、つて書いてあります！」權威ある伊能図と五十円という下世話な値段の取り合わせが可笑しかったので、みんなどつと笑って緊張がほぐれた。何でも昭和八年の五十円といえば中学校教員の初任給くらいだったそうだ。現在の教員初任給は二十万円くらいだから、単純に比較はできないだろうが、ずいぶんお得だったのではないだろうか。

中盤、渡辺名誉代表と鈴木純子理事による解説があった。この伊能中図は大名道具としてどこかの藩の依頼により作成されたのであろうとのこと。またコンパスローズが丁寧に書いてあるかどうかは地図を見極める簡単な目安となるということ。そのほか松浦藩平戸の中図に

ついて、地図上の記号について等々、両氏とも『伊能忠敬研究第九号』所載の記事にふれつつ解説されたので、帰宅してからこの号を再読した。ちなみに、元来コンパスローズは航海図に方位を示すためのものであるが、「伊能図」の場合は航海のためではなく、複数の地図を正しく接合させるための目印として書き込まれているという。接合の目印なら十文字印などでも事足りるはずであるのに、わざわざコンパスローズを書き込んだのは、装飾的な効果を考えてのことであろう。先日研究会の事務局に行った折に地図センター一階の書籍売場で伊能図のコンパスローズを象ったコースターを見つけて購入したが、色彩鮮やかで実に美しいものである。江戸時代の人々にとつてこれがどんなに魅力的に映ったことか。コンパスローズを付き合わせて並べられた大小五枚の伊能中図は、美術品としても第一級のものに見えた。

ところで中図を鑑賞していて思い出したことがある。それは平成八年に清澄庭園「涼亭」で開催された第一回例会の際に見た「測量に際して描かれた沿岸図」である。瀬戸内の入り組んだ海岸線が横長に続く地形は、この地域のものではなかったか。この中図に描かれている中国四国西国の測量は第五次以降であるが、第五次測量から幕府の事業として公認されたので、幕府から隊員がつき、費用も支弁され、各藩に測量への協力が命じられるようになった。事前に地形図が地域から提出されるようになったのもその一環であろう。

地図は平板な紙である。しかしその中にはさまざまなドラマが込められている。たとえば先述した朝鮮を遠望した対馬の地であるが、忠敬先生はここから江戸の長女妙薫に「老岐、対馬共に大難所に候所、」と手紙を送っている。そしてこのあと五島列島で測量隊の副長・坂部

貞兵衛を病気で失う。その失意の心境を江戸の景保・妙薫に「羽翼を落候と同様にて、大いに力を落、致愁傷候。天命致方無之・」と書き送ったが、実はこの景保自身が六月に病死していたという悲痛な状況だったのである。忠敬自身も病に苦しみ、さまざまな苦勞をしながらの測量行であったことなどを、後日測量日記を読みして知った。測量の実態について多少の知識をもつて見ると、眼前の伊能図が厚みをもつて迫ってくる。

伊能図を見学したあと、リバティタワー最上階にある岸本辰雄記念室を見学した。天井がドームになっていて創立者を記念するに相応しい荘重な雰囲気である。天気が良かったので見晴しが素晴らしい。先ほど地図を見学していたとき、見慣れない女性の一群が気になっていた。その女性たちがいたので声をかけてみると、なんと忠敬先生の三女「琴さん」のご子孫の方々だという。三人姉妹と叔母様とのことで、それぞれ横浜市、福岡県、神奈川県にお住まいとのこと。謹厳な忠敬先生の華やかなご子孫との意外な出会いであった。

階下のホールで全員揃って記念撮影をした後、隣接する山の上ホテルで昼食。各々歓談を楽しんだあとは流れ解散となった。

大部分の人が昼食後は明治大学博物館を見学。展示は商品、刑事、考古と分かれているが、私はかねてから興味を持っていた刑事博物館を中心に見学した。ここには江戸時代のお仕置きの数々が展示されていて大変迫力がある。無実の人や情状のある人もいたろうに、苛烈・残酷な世界である。自然、シーボルト事件で獄死した高橋景保に思いを致した。牢内で病死したが「存命候ハバ死罪」であった。高橋家にと



図書館ホールにて 2005.11.12

ってどんなに悲痛な出来事であったことか。弟・景佑（高橋善助）は前述したように伊能測量隊の一員であり、今回見学した中国地域の地図は、彼が測量した所である。景佑の死去からわずか十二年で明治の時代となった。維新後の社会がいかに急速に変化したかにあらためて驚かされた。

刑事博物館を見学したあとは同博物館で開催されていた特別展「江戸時代の大名展」―日向国延岡藩内藤家文書の世界―を見学して帰途についた。

（まえだ こうこ・東京都職員）

明治大学博物館 千代田区神田駿河台―

JR御茶ノ水駅（中央線）西口徒歩五分

☎03・3296・4448

【例会参加者】 敬称略

安藤由紀子	鵜 博敏	伊藤栄子	伊能 洋	伊能陽子
植田浩一	大庭 功	柏木隆雄	加藤巷児	窪谷悌二郎
齋藤 仁	坂本 巍	座間喜美	白根貞夫	進藤綏子
鈴木純子	永野達代	成家淑子	芳賀 啓	福田弘行
藤岡健夫	藤田淑子	前田幸子	宮内 敏	村上昭三
山浦佐智代	渡辺 一郎			
【ゲスト】	松下正巳	中村 薫	坂本夫人	
	小林香久子	岸本純	綿貫利絵	奥永 渚

*本例会の開催にあたり明治大学図書館のご好意に厚くお礼申し上げます。事務局

話題散歩

宗家文書が九州国立博物館に！

「対馬宗家文書」は中世から近世にかけての長崎県の旧対馬藩・宗家に伝わる記録である。本誌でも以前、入江正利さんから「測量御用記録」として伊能忠敬の対馬測量の模様が紹介されている。昨年、これらの宗家文書一万四千点が国の重要文化財に指定された。

朝日新聞（05・11・24）によれば

一九九三年長崎県対馬市にある宗家の菩提寺、万松院に収蔵されていた史料を当主が売却を表明し、熊本県の食品会社社長が購入した。その後韓国へ売却される可能性のうわさが出たため、研究者らが立ち上がり散逸の阻止に奔走する。その結果、史料はすべて文化庁が購入し、今は九博に収蔵されているそうである。

九博はこの史料をデジタル化し、今年度から順次、ホームページで公開する予定。宗家文書は約十万点が確認され、国会図書館や九博など七ヶ所に分かれて収蔵されている。「ネット上で各地の展示を統合」という夢がいずれ実現に向うという。うれしい話題である。その節はまた忠敬さんもお世話になります。

（福田弘行）





もうひとつの伊能図―ただの忠誨星図―

荻原 哲夫

伊能忠敬と近世天文学史に興味のある私にとって、最近の二年間は大変なことの連続でした。それは佐久間達夫さんが会報に連載された「伊能忠誨日記」から始まったのです。これから紹介することは、地図としての伊能図にのみ興味を持っておられる方にはあまり面白くないかもしれませんが、お付き合い下さい。

はじめに

佐原の旧伊能忠敬記念館に「中星儀」が展示されているのを見たのはもう三十年以上も昔のことです。そこには星座早見という簡単な解説が書いてあり、それについて当時は何も疑問を感じることはありませんでした。

その後、一九九八年に江戸東京博物館での「伊能忠敬展」にこの「中星儀」が展示され、これに注目されたのは私の天文仲間の西山峰雄さんでした。西山さんは一九二五年生まれでビルマ（ミャンマー）の古代星座図の研究や巨大星図を見つけ出すなどの活躍をされている方です。西山さんが記念館から中星儀の写真画像を取り寄せて、星座早見としては星の数が異常に多いことを教えてくれました。また、収納箱の蓋裏に貼られた凡例から、作者は足立信順で文政七年頃に作成したものであること、本来の製作目的は星座早見盤ではなく、不定時法での夜間の時刻を知るための装置であるということも判りました。そのときから、なぜこの中星儀が伊能忠敬記念館にあるのかが気になっていました。

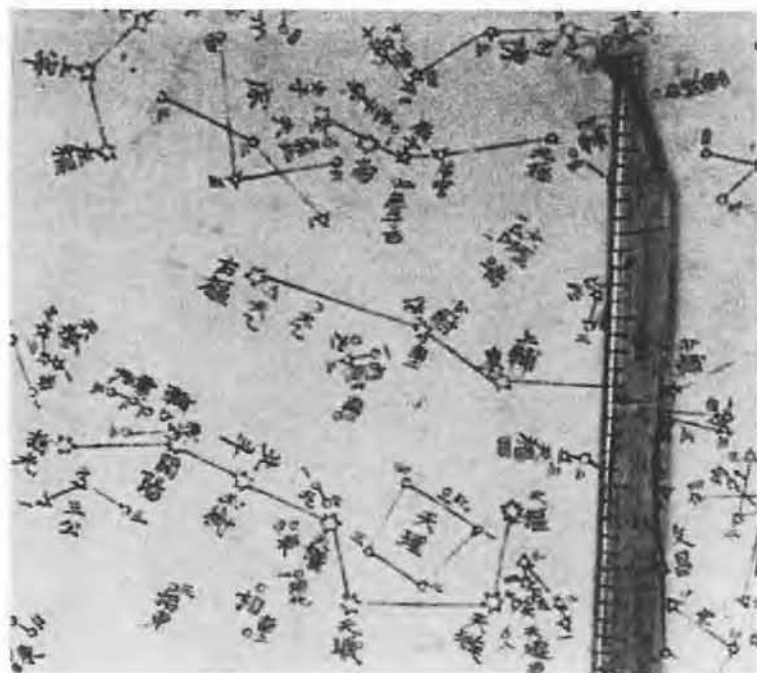


図1 「中星図」の一部分(伊能忠敬記念館蔵)

「伊能忠誨日記」の衝撃

伊能忠誨が忠敬さんの孫であり、二十点程の著作があることは佐原市が発行していた小冊子「伊能忠敬記念館」で知ってはいましたが、その内容についてはほとんど注目してはいませんでした。その忠誨の著作の一つである日記の連載が始まって特に興味を引くものはなかったのですが、第二回の文政三年十一月一九日の「高橋候入来る。…予に星図を認めろと仰せらる也。」という箇所に出くわして、私は目が

覚める思いがしました。さらに、二一日の御くじにより父の後を継ぎ佐原に戻ることを決めるという衝撃的な箇所のと、二三日に「重太郎、予（に）、星図の事は、先ず古の実測をしらべ、後に実測にもれし星は、ランデ推歩を用ゆと言ふ・・・」とあります。これを読んで天文屋として、これは大変な史料が出てきたと思ったのです。もちろん前記の西山さんにも知らせました。

この高橋景保から命ぜられた「星図」とは、あの中星儀のことだろうか。そうではないとしても足立重太郎信順が登場して、忠誨に星図づくり指導をしているのです。中星儀と関係があるに違いないと思いました。ところが、連載が進むにつれて、どうもこの「星図」は中星儀とは違うことが判ってきました。第六回の文政五年十月九日のところに九尺（約二・七m）の絵図板が出てきたからです。中星儀は直径四二cmでしたから、そんな大きな図板は必要ありません。では、どのような星図なのだろうか。謎は深まりました。第七回の文政六年四月八日には「両円図、老図出来る。先達而出来候方図、及び円図、新役所へ預ける・・・」とあり、星図は円図二つと方図があることが判りました。でも、このような星図はどこにあるのだろうか？ これまでの天文学史のどの本にも書かれていない星図があるようなのです。

このようなとき、私にとっては重大な転機が訪れました。それは、私が卒業した日本大学文学部で「伊能忠敬の日本図展」が開催されることになったことです。私は研究会の十周年記念行事のお手伝いを申し出て、打ち合わせの会に参加しました。そこで、伊能陽子さんから驚くべき話を聞きました。これまで傷みが激しいため未公開であった星図を修復に出しており、修復後に特別展示するという話を聞きました。そして修復から戻った星図の展示会用の写真撮影に立ち合わせ

ていただけることになったのです。

伊能家所蔵の星図

果たしてどんな星図があるのだろうか。いよいよ星図との対面です。西山さんに同行してもらい伊能家での写真撮影に立ち合わせていただきました。ひと目見るなり、西山さんと二人で「ああ、これは大変なものが出てきた」と思いました。これが忠誨日記に登場する星図に間違いのない。そう確信しました。星図は全部で五面ありました。「赤道北恒星図星図」、「赤道南恒星図」、「恒星全図」という表題をもつ三つの円図は軸装されていました。他には「大方星図」、「小方円星図」とあ

とで仮称することになる表装されていない星図でした。閲覧時間はあつという間に終わってしまいました。西山さんとも相談して、さっそく専門家である国立天文台の中村士（つこう）先生にお知らせし、展示会に来ていただき、専門家の目で鑑定していただくようお願いしました。

日本大学文学部の「伊能忠敬の日本図展」

平成16年12月6日～23日

いよいよ展示会が始まりました。私は定期券を購入して会期中、毎日会場に通うことに決めました。伊能大図の全国展示のアリーナ会場に比べると、星図等の貴重書展示の会場は地味で、あまり人目を引くものではないため図書館展示場に足を運んだ見学者は半分くらいだったようです。でも私は毎日「星図」を見たいと思ったのです。また星図の展示会場には他にも学士院所蔵の「測量日記」や「山島方位記」の写本など貴重な史料がたくさん展示されていたのです。それらに囲まれているとたいへん幸福な気分を味わうことができ、立ち続けてい

恒星全圖

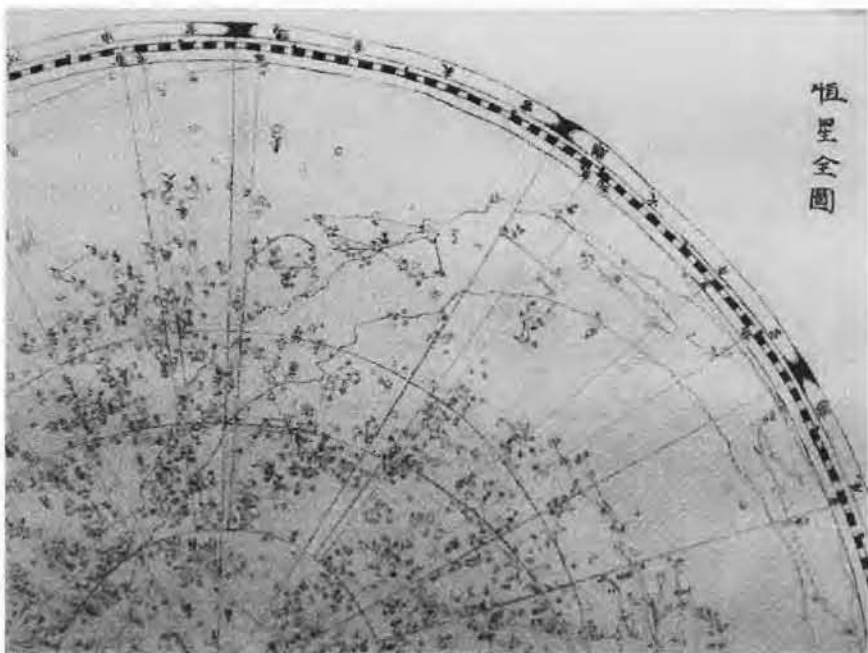


図2 伊能忠誨の「恒星全圖」(3つの円弧のひとつ)

でも苦痛ではありませんでした。残念ながら星図は軸装済みの三軸の円図のみの展示となり、残りの二星図は展示されませんでした。

しかし、他にも幸運なことがありました。研究会の十周年記念会で安藤由紀子さんと会うことが出来たことです。実は私は「伊能忠誨と

文化二年の彗星」について調べるため、高橋景保の「測量御用日記」を読みたいと思っていました。安藤さんは、その釈文を作成されていたので、それを借用することができたのです。

因縁めいた事が続く

会期中の休日に、私は伊能忠誨先生のお墓（東上野の源空寺）にお礼参りに行きました。自分の出身校で伊能忠誨展が開催され、それにボランティアで参加出来たのはまさに忠誨先生のお蔭ですという訳です。また、私にはもうひとつ、気になるお墓がありました。それは忠誨日記に登場する石坂碌平常堅（日記では石坂六兵衛）です。調べてみると本郷区蓬萊町の長元寺に葬られたとありました。地図でみると現在の文京区向丘二丁目で、何と、私が卒業した都立向丘高校の真ん前にはありませんか！

展覧会の終了した後、お寺に出かけ、ご住職に事情を話して、石坂の法諡（おくりな）である「報在院將來日堅居士」を頼りに墓域全部を探索させていただきました。が、見つかりませんでした。ご住職に聞いてみると二十数年前にそれらしき墓三基が埼玉のほうに引越したとのこと。残念。でも私が通学していた頃にはお墓があったことになりました。そういえば私に思い当たることがありました。高校には当時天文台があり、夏の泊り込みの観測会のあと、朝日がやけにきれいであったことを思い出しました。朝日はお寺の方向から昇っていたのです。

ふたたび忠誨日記

さて、忠誨日記の最終回（第八回）の文政八年二月二日には「星方図、座線、宿線等皆出来る。但し書入ればかり残る。右は重太郎に頼む。」とあり、忠誨は最後の仕上げを足立重太郎に託したらしいこと

で星図に関する記述は終わっていました。忠誨は文政九年の春と七月にも江戸に出てきたことがわかりましたが、星図のことは日記に出てきません。

忠誨は文政十年二月二日に二二歳で亡くなります。星図は一体どうなったのでしょうか。私たちが今までに知っていることといえば忠誨が亡くなった翌年の文政十一年十月にシーボルト事件（高橋一件）が起こり、忠誨に星図の作成を命じた高橋景保が捕らえられて翌年には獄死してしまいます。

忠誨が製作し、仕上げを足立重太郎に委ねられた星図はどこにあるのでしょうか？ 完成を見ずに頓挫してしまったのでしょうか？ また中星儀との関係はどうなっていたのでしょうか？

星図の調査

日大での展示が終了してから約一カ月後に、伊能家のアトリエにて国立天文台の中村先生と星図の写真撮影や各星図の寸法などを調査させていただきました。

三軸の円図の円筒の直径は66.8 cmから68.0 cmでした。大方星図は地球の緯度に相当する赤緯がマイナス60度からプラス70度の範囲のもので寸法は縦70.1 cm、横194.1 cmとなっていました。（10度が53.9 mmと54.0 mm）小方円星図は10度が29.7 mmと29.8 mmとなっていました。

中村先生についてですが、お父上はアジア・日本の古地図研究で知られる故・中村拓（ひろし）さんです。また母上は洋画家であつたので、伊能洋さんとは初対面にもかかわらず和やかに会話が進みました。この辺りも不思議な因縁といって良いでしょう。ちなみに本会の代表理事の星埜由尚さんと中村先生は東京大学教養学部（駒場）の同期生であつた由。これまた縁ですね。

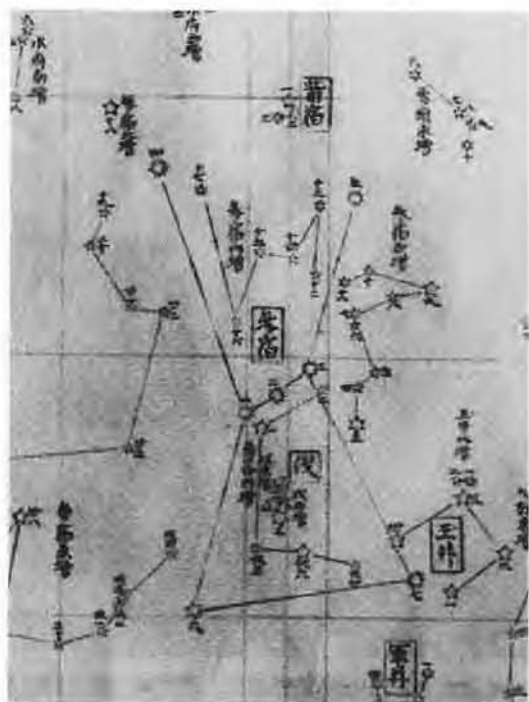


図3 「大方星図」の参宿(オリオン座)の部

足立重太郎から忠誨宛の書簡

忠誨日記から星図に関する進展がそれ以上望めなくなった頃に救いの神が現れました。安藤由紀子さんです。伊能家に残る文書の中に足立重太郎から忠誨に宛てた書簡が十三通残っており、その釈文を作成中なのです。書かれている内容から年号を推定することに協力することを条件に、釈文を見せていただけたことになりました。星図関係する部分を抜き出して見てみると、

文政七年一月四日 星図御清書如何 追々御出来ニも候哉 小生之小図、至去日先中清書出来、近日ニ仕立試ミ候積ニ御坐候 大分立派なるものニ御坐候 併存外ニ手数相無懸り、困入候（星図の清書はいかがですか。段々と出来つつあります。私の

小図「中星儀の図」は清書も進み、近日には仕立てを試みるつもりです、大分立派なものです。が思ったより手数がかかり困っています。

文政七年五月二日 星図は如何、御咄承度候 小生愚考之図、大体此節 峻功仕候（星図はいかがですか。お話を聞きたいですね。私が考案の図は大体完成しつつあります。）

文政九年七月二日 兼て製造之中星儀、当朔日献上ニ相成、同月八日同苗義御城へ被為召、為御褒美 銀子頂戴、難有仕合ニ奉存候先は不朽ニ 御文庫ニ相取り幸甚ニ奉存候 （かねて製造の中星儀は今月朔日に献上され、八日に父・左内が御城へ召し出され、ご褒美の銀子を頂戴し、ありがたいことでした。紅葉山文庫に永く収められることになり幸せです。）

というように、忠誨の星図の進捗とともに重太郎の中星儀の製作状況が記されており、たいへん貴重な書簡であることが判りました。特に、最後の書簡は、「天文方代々記」という書物に記されていた足立左内・重太郎の記事を補完する史料として重要なものとなっています。

星図の針穴

伊能家の星図のうち、「大方星図」に針穴が残っていることを中村先生が発見されました。確かに拡大してみるとほとんどの星には図4に見られるように星型印の中に針穴が存在していたのです。私はなるほど地図の伊能図と同じように星図にも針穴が存在するのだと感心したのです。この針穴は他の星図にも最初に残っていたと思われるが裏打ち・表装の段階でつぶれてしまったのであろうと推定されました。この大方星図が表装されなかったことが幸いしたのです。



図4 「大方星図」(すばるの部分)の針穴

中村先生は高橋景保が作成した星図といわれる「星図の圖」（享和二年作、東京都立中央図書館蔵）についての研究に、伊能忠誨の星図を加えてまとめることを企画され、私を共同研究者に加えていただきました。研究論文は「高橋景保が描いた星図とその系統」（国立天文台報第8巻第3・4号2005）としてまとめられています。

忠敬さんは関係していないのか？

以上のようなことがいろいろ判明してから、伊能忠敬先生は星図作成には全く関係なかったのだらうかという疑問が湧いてきました。そこで、「忠敬先生日記」を調べてみました。次のような二つの記事が見つかりました。

文化十一年十一月二三日 大野弥三郎入来。日向、薩摩、豊後国
図三枚借遣す。星図三軸相返す。

文化十二年三月二三日 遠州横須賀藩中高森宗(惣)右衛門来る。
観好と云う。

一番目のものは全国測量の第八次測量が終わったあとで江戸府内
測量の準備をしている時期です。大野弥三郎を使い、九州の地図と星
図の貸し借りをした相手は平戸侯松浦静山と思われまふ。当然、高橋
景保の指示と了解があつてのことです。この星図三軸がどのような星
図であるかは不明です。

二番目の高森観好という人は、これより一年半前の文化十年八月に
「星座之図」という星図を作成しています。星図を携えて忠敬さんを
訪問したと考えてよいのではないのでしょうか。地図づくりの終わりが
見えてきたとき、高橋景保には、地図の後の事業として星図づくりと
いう構想があり、それを忠敬さんにも相談し、準備を進めていた証拠
と考えてよいのではないのでしょうか。地図の完成を待たずに忠敬さん
が亡くなってしまったため、星図づくりは一時保留となつていたので
しょう。高橋景保は地図の完成の目途が立った文政三年冬至に星図づ
くりを成長した忠誨に行わせようと考えた、と私は想像をめぐらせた
のです。

じつは平成10年6月14日、私は西山さんに誘われて、高森観好の
御子孫の方のお宅での「星座之図」の閲覧に参加していたのです。そ
こには国立天文台の中村先生も来ておられました。私にとって貴重書
画を間近で拝見するのは初めてのことでした。今振り返ってみるとこ
のときの出会いが六年後の伊能忠誨星図との出会いにつながっていた

のでした。

まとめ

文政三年十一月に伊能忠誨は高橋作左衛門景保に命ぜられ、浅草曆
局の足立重太郎信順の指導のもと星図の作成にとりかかり、文政八年
頃には正本としての星図の仕上げは足立重太郎に委ねられ、佐原に引
つ越した忠誨のもとに控えとしての星図が残ったと考えられます。

正本の星図がどこにあるのか不明ですが、「赤道北恒星図」「赤道南
恒星図」「恒星全図」からの写本と思われる石坂常堅の星図が見つかっ
ています。福山藩士の石坂は当時、暦局の景保の下におり、忠誨は石
坂の蔵書の「儀象考成」を写しています。つまり、景保の下、三人で
共同して星図を製作したといえましよう。石坂の「方円星図」、重太郎
の「中星儀」と「伊能忠誨星図」はほぼ同時期に生まれた星図三兄弟
といつてもよいでしょう。(景保の「星座の圖」を加えれば四兄弟です。)

おわりに

伊能忠誨日記を連載された佐久間達夫さん、足立重太郎の書簡の釈
文の閲覧を許された安藤由紀子さん、そして「伊能忠誨星図」を閲覧
させていただいた伊能洋・陽子さんご夫妻に感謝いたします。中村士
先生には国立天文台報の論文の共著に加えていただき、高橋景保の星
図からの関連という、より広い視野での伊能忠誨星図の捕らえ方を教
えられました。それにより「忠敬先生日記」に関係する記述を見つけ
ることもできました。御礼申し上げます。

(おぎわら てつお・東亜天文学会歴史課長)



「測量御用留帳」表紙 紀和町西家文書

好物やもてなしぶりも

三重を通った伊能忠敬測量隊

三重県史資料叢書から

伊能忠敬は、江戸時代に精巧な日本地図を作製したことで有名である。数年前には、三重県でもその偉業を検証しようということで、シンポジウムや「伊能ウオーク」などさまざまなイベントが行われた。

最近、県史編さん事業の一環として、伊能忠敬測量隊が伊勢、志摩、紀伊国や西国を測量した1805（文化2）年の第五次測量の記録を翻刻している。それは、尾鷲や熊野地域に残された『御用留』で、その中から部分的ではあるが、忠敬の人物像、測量隊の実態、地域でもてなしなどの様相が見えてくる。

忠敬の測量は、忠敬56歳の1800（寛政12）年の蝦夷地測量から、72歳の1816年江戸府内測量までの17年間、都合10回にも及ぶ。

三重県における伊能測量の模様が三重県史資料叢書2として復刻されました。紀和町西家文書と尾鷲組大庄屋記録です。忠敬研究の新しい史料として大いに歓迎いたしております。会員の皆様に公開をお願い致しましたところ、このたび三重県生活部文化振興室のご承認を頂きました。ここではこの史料に関する解説をお知らせいたします。三重県のご厚意に感謝申し上げ厚く御礼申し上げます。 編集部

その測量は、当初幕府の補助を受ける形であったが、測量を重ねるに従い、その実績が認められて1805年の第五次測量からは幕府直轄の測量隊となったのである。そのため、第五次測量以降とそれ以前とは地域での扱いに大きな差が見られる。

第五次測量は、東海道から志摩半島、紀伊半島、琵琶湖岸、山陽道、山陰道、再び東海道を通って江戸に戻る約7千キロにも及ぶコースであった。三重県域の通行は、往路が1805年4月9日の桑名宿から7月1日の木本浦まで、復路は翌年10月24日の関宿から28日の桑名宿までである。特に『御用留』は往路の測量隊通行にあたり作成された『測量日記』によると、測量隊の一日は、毎日六つ半頃（午前7時）出立、八つ（午後2時）頃終了で、夜には天体観測を行っている。

幕府巡見使通行の迎接の様子と『御用留』の内容はかなり類似するところがある。すなわち、地域では大庄屋や帳書（大庄屋の補佐役）などが中心となつて情報収集し、それを書き留めて綿密な準備を進めた。接待の方法も巡見使通行と共通する部分が多いが、測量隊の通行では地域で測量や荷物人足等が多数駆り出されている。測量隊の総勢は14人で宿は1軒、無理な場合は寺などを宿泊所とすることもあった。

食事は一汁一菜、測量器具の取扱い、測量のための10坪ほど空き地を用意することなどが各村々へ伝達された。

また、『御用留』には、忠敬の嗜好に係る記事も見られる。例えば、忠敬は「めしは黒キ方御きらひ」と白米を好み、五ヶ所浦では「機嫌が悪く、膳の菜には手をつけず、飯ばかり食し、自分の荷物から贅節を取り出し菜にした」ことも記されている。

また、尾鷲大庄屋記録の中には測量隊通行にあたって作成された「入用帳」が残されており、そこからは地域の負担を確認することもできる。このように、地域では測量隊を万全の体制で迎接することに心掛けたが、「とかく丁寧にし、御用向きを早く片付けるようにすることが上策」と、本音も見られる。（『東史編さんグループ 藤谷彰』）

伊能忠敬測量隊の記録

—文化二年東紀州地域における—

はじめに

伊能忠敬が江戸時代に精巧な日本地図を作製したことは周知の事実であり、五十歳を過ぎてからの十七年間にわたる測量調査旅行は、現代に生きる私たちに多くのことを学ばせてくれる。それだからこそ魅力的であり、忠敬の人物像や測量の実態を検証しようということが行われるのではないだろうか。忠敬に関しては戦前から様々な角度から調査研究がなされ、近年では彼をモデルとした小説の刊行、また平成の測量隊を結成し、忠敬の偉業を検証するため忠敬の通った道を歩くというイベントも実施されている。忠敬は測量に際して膨大な日記を遺しており、各地域には測量隊を迎え入れるための御用留などの史料が多数残存する。このことも各種事業を手助けすることとなってい

る。

本稿では、多数残存している地方史料のうち、忠敬の第五次測量にあたって作成された紀州藩新宮領三ノ村組大庄屋を勤めた西与茂七による「測量御用留帳」、同藩尾鷲組大庄屋土井徳蔵による「測量為御用諸国順道通行被成候二付右取扱扣」「測量之節諸入用郡割帳」などの史料についての解説、及びその史料群の分析から解明された伊能忠敬測量隊の地域における送迎の実態の把握を行い、地域にとって測量隊通行はどのような意義を持ったのかを明らかにしたい。

一 史料解説

(一) 西家文書「測量御用留帳」

西家は、中世より和気村（現紀和町）に居住し、江戸時代には紀州藩新宮領和気村の庄屋や和気を含む十か村で構成されている三ノ村組大庄屋などを勤めた家である。御用留の作成者である西与茂七は、幼名小吉、のち小重郎、家督を継いでから与茂七と改めた。実名を俊人といい、寛政八年（一七九六）から同十二年まで和気村の庄屋を、同年四月から文化六年（一八〇九）まで新宮領三ノ村組大庄屋を勤めた。

また、西家文書は文書・書籍等総数約一万八千点にものぼり、最古の文書は永享九年（一四三七）九月十四日の土地売券で、最も新しいものは昭和四十八年（一九七三）二月四日の調査書類である。大半は近世から明治・大正期のもので、そのうち近世分約八千五百点、明治以降は約九千五百点である（『西家文書調査報告書』）。

今回翻刻する「測量御用留帳」は、二冊が合冊されたものである。一冊目の表紙には「文化二年丑二月 測量御用留帳 三ノ村組」とあり、与茂七が三ノ村組大庄屋として測量隊通行にあたり準備したものである。それは文化二年丑二月の天文方に関する公儀触から始まり五

月四日の三ノ村組大庄屋であつた西与茂七発給の廻状までが書き留められている。その項目は、第五次測量より幕府天文方となったことで勘定奉行よりの触、測量の基礎資料とするための各村落の書上帳案文、四日市宿問屋年寄からの触、紀州藩白子領大庄屋・長島組大庄屋の廻状、藩役人からの触が書き留められている。

中でも四日市問屋年寄からの触では、測量道具持人足は村ごとに引き継ぐのではなく、宿泊所から次の宿泊所までを通して人足をするのと、測量が往還筋と海辺筋の二手に分かれても宿泊所は一所とすること、毎夜宿泊所より先触を出すので前の晩に御用伺いとして宿泊所に出向くように、と指示されている。そして、見分先での梵天持などの人足分担が記され、合計で三十人の人足が必要であつたことや宿村の書上帳を案文に従つて前の晩に宿泊所へ持参するように指示されている。この触は廻状で伊勢神戸より紀州熊野路を経て大坂まで順達するように、とある。この書上帳については、伊能測量隊からの指示では村明細帳と人別帳を差し出すようになつてゐるが、実際には和歌山本藩の指示で村明細帳のみの差し出しとなつてゐる。

また、測量隊の順路と関係のない三ノ村組での「測量御用留帳」が作成されたのは、新宮領役人から川長（熊野川沿い）大庄屋宛に「公儀御用之義二候へ者随分諸事入念取扱可被申候」と、この測量隊が公儀御用であるので入念に取り扱うようにとの指示や西与茂七自身が「新宮より川長江御登り可被成哉と存候」と測量隊が新宮より川長にやつてくる可能性があると考えていたことなどが理由であらう。

二冊目の表紙には「文化二年丑四月 御測量御用二付諸事留帳 式番三ノ村組」とあり、一冊目に続くものである。有馬組大庄屋久保久平

発給の四月二十七日の廻状から木本浦に着いた六月二十九日の木本詣三人からの書状までの分が書き留められている。そして、最後に「右天文方御役人七月二日新宮御泊り、三日御逗留、四日天満村御泊り、五日那智山、同日天満村御泊り、夫より大辺路通御越被成候、以上」と天満浦（現和歌山県勝浦町）までの予定が書き記されている。二冊目の項目は勢州奉行からの通達、勢州関合覚書、長島組大庄屋・尾鷲組大庄屋の書状、伊能忠敬から出された触などが書き留められており、測量隊の動向や情報を書き記したものが多く見られる。

（二）尾鷲組大庄屋記録

尾鷲組大庄屋記録は紀州藩尾鷲組の大庄屋役所に伝来した文書群であるが、明治時代以降文書売却、水産庁への貸し出しなど料余曲折があつたが、最終的に昭和三十一年（一九五六）四月に尾鷲市に戻された。以降三十三年、四十二年に分類整理が行われ、三十五年には三重県の有形文化財に指定された。その文書群は宝永四年（一七〇七）から明治初期にかけてのもので、製本冊数一、八一〇点、総点数一万二千五百点ある『尾鷲組大庄屋目録』、『三重県史』資料編近世。これらはほとんどが冊子形態のものであるが、それとは別に一紙物が段ボール二〇箱ほどある。現在、三重大学人文学部塚本ゼミを中心にして資料整理を行つており、当県史編さんグループも参加している。

今回翻刻した史料は、当時尾鷲組大庄屋であつた土井徳蔵により書き留められたもので、以下それぞれについて解説する。

1 「公儀御役人衆上下拾四人此度測量為御用諸国順道通行被成二候

付右取扱扣（以下、「取扱扣」と略記する）」

文化二年（一八〇五）四月から十一月まで土井徳蔵によつて書き綴

られていたもので、西家文書の「測量御用留帳」に相当する。西家文書同様多くの項目が書き留められている。西家文書と重複する部分も多く、勘定奉行よりの帳、各村落の書上帳案文、四日市宿問屋年寄からの帳、紀州藩白子領大庄屋・田丸大庄屋中からの書状、勢州関合覚書、長嶋組への関合、長嶋組帳書与左衛門よりの書状や覚、長嶋組大庄屋からの書状、伊能勘解由からの取扱心得、尾鷲組大庄屋の廻状などである。そのほか、尾鷲組大庄屋記録単独のものとして、東海道沿いの村々からの先触や四月中の長嶋組・相賀組・尾鷲組・木本組大庄屋同士の書状が書き留められている。

また、西家文書との大きな相違は、測量隊の通過後も廻状のやりとりをし、それを書き留めていることである。内容は、測量隊の通行や奥熊野においての在々宿泊の様子を木本代官所へ知らせるようなとの書状、測量隊の証文、組単位の諸入用の取り纏めの指示、測量方下役交代の勘定奉行からの触などであり、十月には測量諸入用手形帳を木本代官所宛に送っている。諸入用に関しての一連の作業の完了は測量隊通過の約二年後であった。

2 「公儀御役人中測量之節諸入用郡割帳」

表紙には「文化四年卯五月」とあり、測量隊通過後ほぼ二年を経過した時点で作成された縦帳である。この冊子は昭和期の資料整理時に合冊された可能性がある。この冊子により測量隊に関する帳簿作成が完了することになる。文化二年の往来入用帳に始まり、諸入用郡割帳まで足かけ二年、測量隊の受け入れにあたって地元では用意周到な準備を進めてきたことが確認される。

3 「去丑夏就測量御用公儀御役人中尾鷲組浦々御通行之節入用人足

仕出し帳」

文化三年（一八〇六）五月に作成された縦帳である。この帳面は、現在、三宝院門跡通行に関する史料などと合冊されているが、もともとは一冊で存在したものを昭和三十年代の資料整理時に合冊したのであろう。また、その作成は尾鷲組となっていることから大庄屋土井徳蔵が関係していると思われる。伊能測量隊通過の翌年に作成されており、尾鷲組として人足一、〇八五人を動員した。その内訳は六三〇人が海陸測量人足、一五〇人が須賀利浦・九木浦・尾鷲浦での五泊の夜の不時御用人足、五〇人が昼食・宿泊所の賄い人足、三〇人が島々海辺間敷下調べ人足、四〇人が須賀利浦・尾鷲浦・九木浦・早田村の休憩所・宿泊所・橋修繕の大手伝掃除人足、四三人が荷物積み廻し人足、一四二人が尾鷲組在々の道橋破損所修繕人足である。ここから見ると六〇%弱は測量に関係する人足である。

4 「公儀御役人中測量就御用浦々御通行之節御入用銀米請取手形扣」

文化三年九月に作成された縦帳である。入用人足仕出し帳同様他の史料と合冊されているが、もともとは一冊であったものが合冊されたのであろう。これは、通行にあたって地元での入用米や銀に関して測量隊から下付されたものの記録である。2の郡割帳にも「御下ケ銀」「御下ケ米」としてこの分が記されている。

5 「測量方御役人様御入込之節在々出人足帳」

文化二年六月に尾鷲組で作成された横帳である。測量隊が尾鷲組を通行する前々日の六月十七日から二十一日までの人足に駆り出された人名が記されている。人名は南浦・林浦・中井浦・堀北浦・野地浦な

ど、その多くは尾鷲浦の住人であったと推測される。そして、その役割は伝達役である「あるき」と大工が中心であった。

6 「測量御用荷物扣帳」

文化二年六月二十三日付けで作成された横帳である。測量隊がどのような荷物を持ち運びしていたのかが把握できる。間棒・鎖など測量機器のほか、駄荷・座包・籠・柳ごおりなど測量隊員の身の回り荷物も記されている。

7 「測量方御役人衆御通行ニ付御代官所江御伺御用本本江罷越候節 往来入用帳」

測量隊通行の際に、本本代官所へ御用御伺いのため村役人が尾鷲・本本間を往復したが、その時の費用を書き記した横半帳である。文化二年四月二十五日に尾鷲を出立し、二十七日に帰着と表紙には記されているが、その内容は二十五日の三木里から曾根浦までの船賃から二十八日までの四日分の入用が記されている。二十五日には船賃のほか、曾根浦での昼食代、二木嶋での宿泊代、二十六日には新鹿や茶屋での茶代、草履代などが記されている。二十七日には本本での宿泊代、酒肴代、帳書の昼食代、二木嶋での昼食支度金、二木嶋よりの船賃、曾根浦より三木里までの船賃、二十八日にかけての八木山荒神堂での宿泊代など合計錢三貫七二文となっている。そのほか、五二四文が二十五日から二十八日までの日雇い賃、二口で三貫六百元（合計金額は合わない）であった。測量隊を迎えるにあたり、尾鷲組内で判断できない事項はすべて本本代官所へ伺いを立てており、そのために通行前にも多くの費用が必要だったのである。

二 伊能忠敬測量隊と地域での迎接

(一) 伊能忠敬について この項は誌面都合で省略させていただきます、編集部

(二) 忠敬の測量概況 同右

(三) 第五次測量について

今回翻刻する測量は、文化二年から三年にかけての第五次測量のうちの伊勢国・紀伊国のコースである。その人員は伊能忠敬・高橋善助・市野金助・坂部貞兵衛と付添一〇人の合計一四名で構成されている。また、この文化二年の第五次の測量から幕府測量となった。その行程は、文化二年二月二十五日から文化三年十一月十五日まで六四〇日、東海道、志摩半島、紀伊半島、琵琶湖岸、山陽道、山陰道、隠岐、そして再び東海道を辿る約七千*にもなるコースであった。

その間、三重県域通行は往路の文化二年四月九日の桑名宿から同七月一日の本本浦まで、復路は文化三年十月二十四日の関宿から同二十八日の桑名宿までであった。特に本稿で翻刻した尾鷲から新宮にかけては文化二年六月十九・二十日に須賀利浦、二十一・二十二日引本浦、二十三日尾鷲中井浦、二十四・二十五日九木浦、二十六日三木里、二十七日・二十八日二木島浦、二十九日・七月一日本本浦、二・三日新宮を通行している。

ここでは、前半では西家文書「測量御用留帳」を中心に伊能測量隊の様相、後半では尾鷲組大庄屋記録の「取扱加」から通過後の様子を検討してみたい。

伊能測量隊の通行にあたり、道中奉行から出された触が新宮領の場合には新宮領役人の名で出されている。そして、二月二十四日付けで伊能忠敬ほか三名連名で江戸伝馬町、品川から桑名までの東海道筋、伊勢国から摂津国大坂までの海辺の宿々、村々、問屋、名主、年寄中宛

に先触が出されている。

四日市宿では、問屋年寄からの先触が出された。それは、第一章史料解題西家文書「測量御用留帳」で触れたように、測量道具持人足のことや宿泊所の同宿のこと、毎夜宿泊所で先触を出すので御用伺いとして宿泊所に向くようにと指示している。さらに、見分先での人足分担や宿村の書上帳の提出指示、触は廻状によって伊勢神戸より紀州熊野路を経て大坂まで順達するようにとしている。

「勢州開合覚書」では、宿泊所での接待の様子を書き記している。ここでは四日市宿で出された先触の趣旨を重んじ、それに従って対処するように記されている。「有馬組より木本組へ出張した帳書代より開合の覚書」では、質問に回答する形で測量隊は総勢一四人であるので宿は一軒で対応すること、できない場合は寺などを宿所にする、膳部は一汁一菜であること、測量器具のこと、測量のために一〇坪ほどの空き地を用意すること、一船は一五艘、人足は一〇人計り用意すること、出迎えの衣服のこと、天候による測量の有無など一四項目が書き記されている。「槌柄組より心得に申越候事」「下筋より木本へ通詞書写」なども同様の趣旨で伊能測量隊迎接についての注意書きが見られる。

測量隊の動向を把握するために長嶋組帳書と左衛門が槌柄組へ派遣され情報収集を行い、その情報を相賀組帳書甚七、尾鷲組帳書八右衛門、木本組帳書文右衛門へ書き送っている。それによれば、測量隊は通常の測量では一日に二、三里測量するが、志摩国では嶋々が多いために予定した測量ができず、日程も大幅に遅延していることが書き記されている。同時にこの時期、紀州藩の殿様が伊勢参宮をしているために地元では測量隊、殿様の迎接と混乱の様子が見られる。また与左衛門の覚には、槌柄組での測量隊の日程が書き記され、そこでの接

待や宿泊に関する情報がわかる。興味深いこととして忠敬が「めし黒キ方ハ御きらひ」「上々白キかせ用意」と白米を好んだことが知れる。

六月十六日の尾鷲組帳書八右衛門から木本組帳書文右衛門及び左衛門宛てた書状では、「五ヶ所では（忠敬が）機嫌が悪く膳部などの菜には手を付けず、飯ばかりを食し、自分の荷物より鯉節を取り出してそれを菜にしていることや（地元の者が）紀州風を吹かせているなどと申し分があった」としている。そこで、「御機嫌とりをしようとして茶を出したりしたが、破茶碗であつたため飲まず、夜になつたので蚊帳を吊り寝るといっている」とし、いろいろと詫言をいつたが、「此度御用大ニシクジリ」と接待が上手にできなかったらしい。また、同日には錦浦で月蝕の観測を行ったがうまくいかなかったことも記されている。

六月二十四日の矢口武右衛門の書状では、天文方が岡崎の川を十里ほど測量したことから、熊野川でもそのような測量がある可能性を示唆している。また、この日は、忠敬が尾鷲において「熊野尾鷲浦々では、前宿々の村から先々の村へ心得触が出ているようであるが、それには無益の手当等もあり甚だもって相違の儀がある。これからは心得触は一切用いないようにし、そして、前々の宿泊所へ来て、測量御用向きや道案内等を聞き合わせ人馬そのほかをきちんと取り計らうように」との触を出した。このことを受けて尾鷲組大庄屋土井徳蔵が「尾鷲組浦々にて取扱候趣」を紀州領ほか泉州堺大川までの浦々役人中宛てに廻状を出している。

さて、ここまで測量隊通行の様相を西家文書の「測量御用留帳」から眺めてきたが、実は尾鷲組大庄屋記録の「取扱扣」も内容に若干の相違はあるものの概ねこのような内容が記されている。しかし、二つ

の「御用留」では大きな差異が見られる。それは、西家文書では通行までの様相しか書き記されていなかったが、尾鷲組大庄屋記録では測量隊通過後の様子も書き記されているのである。これがどのような理由によるものかは不明であるが、最後に尾鷲組大庄屋記録から測量隊通過後の様子を見てみたい。

天文方の通行直後には測量日程、測量の様子、指出帳面の写しを送ってもらったための要請の書状が測量隊到着前の村方から土井徳藏宛に届いている。また藩勘定奉行衆から天文方の奥熊野においての在々宿泊の様子を書面にて知らせるように、との木本代官所からの書状も見られる。閏八月には測量隊の証文ほか諸入用を組単位で帳面に認めるような指示も出された。九月十日には測量方下役市野金助が尾鷲で病氣になったことを受け、その代わりとして下河部政五郎を指し遣わす旨の勘定奉行からの触が出ている。十月には八月の指示に基づいて、測量にあたっての諸入用手形帳を在方役所（尾鷲組大庄屋）から木本代官所宛に送っている。これら諸入用に關しての一連の作業が完了するのは、測量隊通過の約二年後のことである。

（四）地域の負担と諸入用について

大谷亮吉氏はその著『伊能忠敬』で、文化二年（一八〇五）の幕府役人としての測量とそれ以前とでは、測器の運搬、測量手伝のための人足徴発、藩での測量隊の取り扱い等について格段の違いがあることを指摘している。すなわち、文化二年以降測量条件がよくなったのである。

次に入用の点について検討してみよう。まず、伊能忠敬の測量にあたりどれぐらいの費用がかかったのかについて見るが、大谷氏は文化二年から三年にかけての測量では、米五七石二斗六升、金六〇一兩一

歩、銀一貫八四三匁五分、そのほか筆墨紙蠟燭代として約金二〇兩かかったとされている。ちなみに、寛政十二年（一八〇〇）蝦夷地方測量より文化（政力）四年奥地全図完成までに幕府・忠敬・地域の負担額は一万三千兩乃至二万兩程度とされている。

では、実際に地域での迎え入れにあたってどの程度の負担があったのかを尾鷲組大庄屋記録から検討する。これについては既に『尾鷲市史』上巻に若干の分析がなされているが、尾鷲組を中心としたものとなっており、その他の組も含めて考察してみよう。

伊能測量隊通過後の文化四年五月に作成された「公儀御役人中測量之節諸入用郡割帳」によれば、通行に伴う諸入用は、長嶋組三貫二七匁四分三厘、相賀組一貫二四八匁二厘、尾鷲組三貫五五匁五分、木本組四貫五分五厘の合計から測量隊より下付された「御下ケ銀」「御下ケ米」分を差し引いた八貫六六匁七分九厘であった。そして、これらの諸入用の内訳は各組とも下付銀・米のほか人足賃、宿泊代賄木賃米代受取差引残金（不足金）、宿泊代、昼食代の四項目で構成されていて、それに入用品紙代、大庄屋・帳書・大庄屋付小者・帳書着替持の宿泊代が加算されている。合計八貫六六匁七分九厘を本宮組・入鹿組・北山組・木本組・尾鷲組・相賀組・長島組の七組で「高割」「家数割」「等分割」の三種の基準で分けている。「高割」は二貫八八八匁二分二厘、「家数割」は二貫八八八匁一分三厘、「等分割」は二貫八八八匁四分四厘であり、合計をほぼ均等に分け、それぞれの組が負担した。

おわりに

最後に幕府の測量隊ということ、天明八年（一七八八）にこの地を通行した幕府巡見使との迎接の差異及び伊能測量隊の通行の影響について述べまとめたい。

まず、測量に伴う準備は幕府直轄の測量隊ということで幕府巡見使と同様、藩役人の指示のもと大庄屋・帳書が中心となっている。中でも広域的な連絡網を有する大庄屋の役割は大きく、その補佐役となる帳書を事前聞き取りに行かせたりしている。入用及び出人足などの地域負担は、忠敬の幕臣としての格式や性格など個人的なものが影響し、食事宿泊所などは巡見使より簡素な扱いであった。しかし、地元にとっては、通り一遍の巡見使の通行と異なり、測量という実務的なことが要求されるため実質的な負担は大きかったと推測される。また巡見使とは異なり、前例がないために藩や地域での対応に混乱が見られる。

さて、地域への社会資本の投入という側面に目を向けてみると、巡見使では道橋普請などの整備が行われていたが、測量隊の通行では、そのようなことは大々的に行われていない。本来、巡見使は地域巡察が目的であるので差異があるのは当然の帰結であると言え、それまでもが、地域にとって見れば、二つの幕府役人の通行には大きな差異があった。巡見使通行は負担があっても社会資本整備が図られた。伊能測量隊は負担のみでメリットがもたらされなかったと推測される。事実、尾鷲組大庄屋土井徳蔵から濱地善之丞に宛てた書状には「兎角町寧二致手行よく御用向早ク片付候様之手段致申方上策と奉存候」(西家文書「測量御用留帳」(六月十八日書状))とあり、地元の測量隊への本音を垣間見ることが出来る。しかし、翻刻史料にはないが、文化五年(一八〇八)からの第六次測量では、四日市末永村の住人山中忠左衛門が測量隊に加わり測量に参加している事実もあり、地域からの門人の輩出という点は注目し得る(大谷『伊能忠敬』)。ただ、ここでは第五次測量だけの分析しか行っておらず、ほかの年次の測量を分析することで違った側面も見出せよう。例えば、第四次測量までの測量

隊の扱いと第五次以降の測量隊では測量隊の位置づけが異なるために地域での送迎の様相も大きく異なるはずである。この点については、第四次測量の際の加賀藩での研究がなされているが、それを見る限り「勘解由は百姓舂浪人者にて、いまだ公辺へ被召出無之軽き者之由」(加賀藩史料)とあり、忠敬の身分に関してこのような認識であることから測量隊の扱いもこれに類した扱いがなされたものと推測される。今後は、他地域や第六次・第八次測量の地域史料の発掘から取りかかっていきたい。

(藤谷 彰)

参考文献

- 大谷亮吉 『伊能忠敬』 岩波書店 一九一七年
- 保柳睦美編 『伊能忠敬の科学的業績』 古今書院 一九七四年
- 藤田 覚 「伊能忠敬と大地測量の技術者たち」(永原慶二ほか『講座・日本技術の社会史別巻1』日本評論社 一九八六年)
- 千葉 県 『伊能忠敬書状』 千葉県史料近世篇 文化史料一 一九七三年
- 千葉 県 『伊能忠敬測量日記一』 千葉県史料近世編 一九八八年
- 竹内慎一郎 『地図の記憶ー伊能忠敬・越中測量記ー』 桂書房 一九九九年
- 渡邊 一郎 『伊能測量隊まかり通る』 NTT出版 一九九七年
- 渡邊 一郎 『図説伊能忠敬の地図をよむ』 河出書房新社二〇〇〇年
- 前 千雄 「伊能忠敬と熊野」 『熊野誌』第四十四号熊野地方史研究会 一九九八年
- 尾鷲市役所 『尾鷲市史』上巻 一九六九年

新地域史料

越後国岩船郡内沿海測量について（二）

「測量日記」と「与惣左衛門覚書」より

風間 広吉

編集部 この史料は二十一年前に公開された、新潟県岩船郡内での忠敬測量の記録です。当時新潟県立村上桜ヶ丘高等学校の風間広吉先生の労作です。伴田家文書と忠敬の測量日記を併せ解説しております。折角の貴重な史料公開を新潟支部の垣見さんにお願いました。このたび、有難く風間家のご了承を得られましたので報告致します。風間先生はじめ風間家に厚くお礼申し上げます。なお、史料につきましては佐久間達夫氏にご助言をいただいております。

はじめに

去る昭和五十七年、研究資料の取材に市内岩船上町の伴田家に伺った折、一冊の古文書を示された。「測量の勉強の参考になれば」とのお口添えであった。その古文書とは、表紙に

享和二年壬戌九月廿一日
為測量御用天文方伊能勘解由様
奥羽越海辺御通行当町御泊之節覚書
石船町年寄 伴田与惣左衛門

とあり、美濃判二つ折四十三丁、ほかに半紙一枚の覚書である。

その内容は、忠敬の第三次測量に際し、幕府より発せられた「御達書」（写）にはじまり、その経路の地方の役人等の書状など。最後は伴田家における天文測量の様子やお泊りのくさぐさ、翌朝のお見送りの有様を記録されたものである。

伴田家の覚書は、町年寄所の公式記録「御用宿継帳（壬享和二歳）」から後日沿海測量にかかわる記録を抄出し一本にまとめたもので、伊能忠敬の「測量日記」が、忠敬の日記から後日清書したものと両者軌を一にしている。いずれも所懐などを加筆してあり、原本にくらべて内容詳細である。

一、伴田与惣左衛門覚書と解説

1

御達書之写

天文方

高橋作左衛門弟子

伊能勘解由

右者为測量御用、北国筋江被差遣候二付陸奥国三馬屋より西之方海辺二添ひ、北海通り出羽国越後国浦々罷通り、致測量候間、差支無之様、可被致候、右之趣掘田撰津守殿被仰聞候二付、申達候

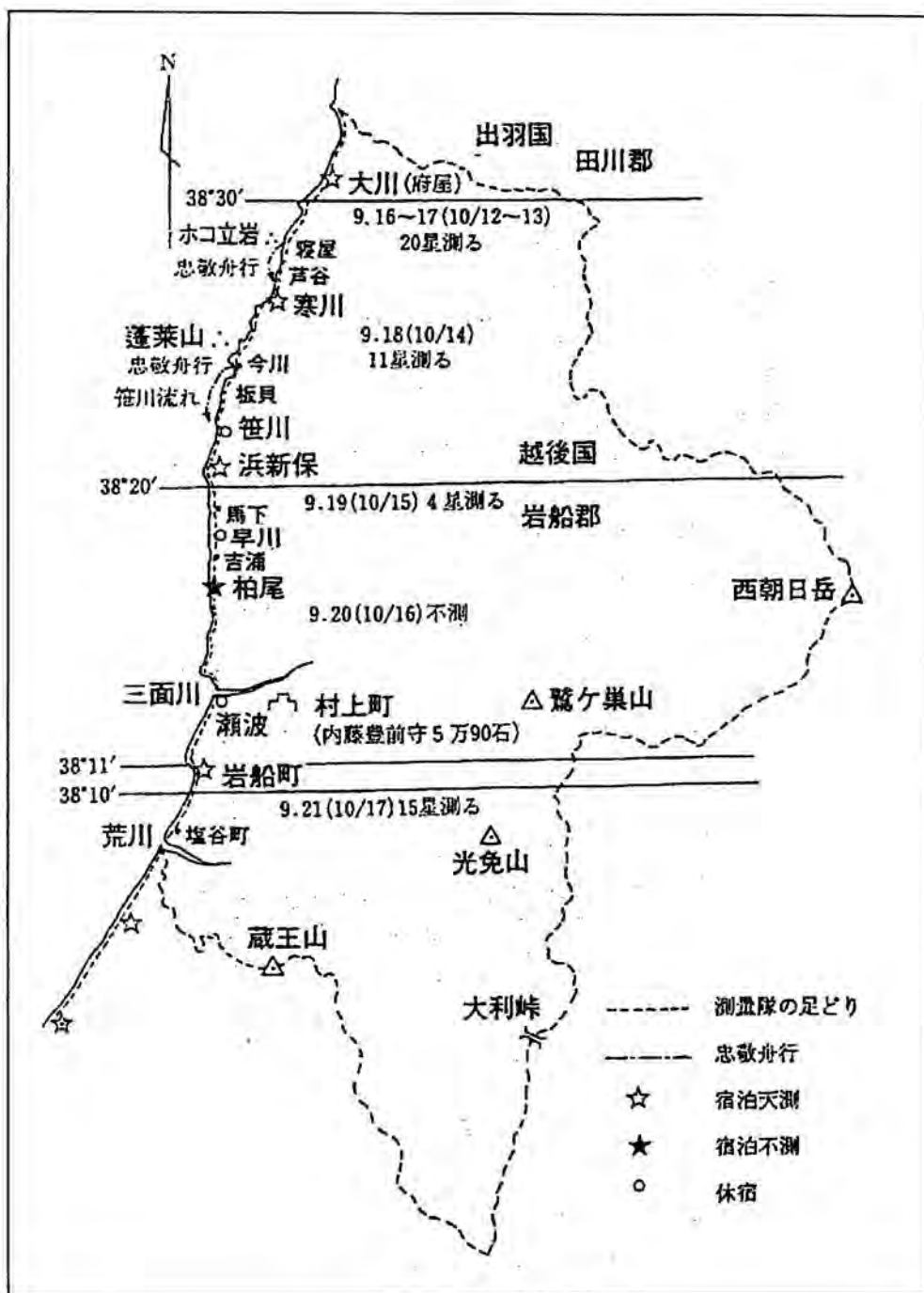
御勘定組頭

田中五郎左衛門

松山惣右衛門

支配勘定

若山弥市郎



伊能忠敬の越後岩船郡内沿海測量

2

別紙之通此度江戸表より申来候間、海辺附村々ニ而者指懸り、其所におゐて測量可有之も難斗、兼而得其意、尤いつ此被相廻候哉不相知之間、先触相達次第早速可被申出候、此段申達候 以上

六月廿一日

近藤敬治右衛門
伊久美奥右衛門

木野村勇助

上海府組

瀬波町

岩船町

塩谷町

桃崎浜

幕府勘定方から発せられた「添触」と、これを受けた村上藩から海辺つ浦々の村に出された通達である。

幕府や豪の要人が道中するときは、幕府から前もって沿道の宿駅や村々に、人馬のやとい入れ、渡船、川越、宿泊などについて便宜をはかるよう通知がある。これには二通りあつて、幕府勘定方から出される「添触」と、重要人物の道中に当つて、幕府勘定奉行から発せられる「先触」がある。先触は絶対的な命令書で権威がある。忠敬第一次の測量（寛政十二年、一八〇〇年）には添触であつたが第二次（翌享和元年）からは先触となる。冒頭の達書は、先触に先立つて発せられたものである。なお第一次測量時の身分は元百姓浪人で高橋作左衛門至時の弟子として命ぜられている。第二次以降は士分に準じ、第五次以降小譜請組十人扶持の士分となる。勘解由は、忠敬が五十才（以下満年齢）に家督を子景敬に譲り退隠したのちの名であり、伊能家代々の隠居名である。隠居後江戸に出て、十九才年下の高橋至時に天文・

測量を学んだことは著名である。なお第三次測量時は忠敬五十七才であつた。

先触が出されるようになったのは、測量の精度が幕府に認められたことを表わし、以後幕府の肩入れが増し、第五次測量（西国）以降は幕府直轄の測量となる。堀田摂津守、名は正敦で暦局（現在の天文台、緯度観測所、国土地理院に当らう）を所管する若年寄である。

3

追而此触書早々相廻承知之旨、別紙請書相添留
より宿村送りを以、左通役所江可相返候 以上

天文方

馬三疋

一、人足五人

長持老樟

持人足

右者、此度北国筋海辺浦々測量為御用被差遣候
二付、書面之通無賃之人馬被下候間、於宿々村
方ニ其旨相心得往返共無滞可差出者也

戊 和泉印

六月八日 左近印

飛弾印

主膳印

美濃印

江戸伝馬町

日光道中

千住宿

奥州道中

白川宿

羽州 若松通り

米沢

上ノ山

津軽弘前より三馬屋迄

右宿々

問屋

年寄

名主

組頭

別紙奥州三馬屋より越後高田迄之触書老通相添差

遣候間、一同可送届候 以上

戊 六月八日

先触である。第三次測量からは無賃の人馬を出させる権限が与えられた。また第一次測量には幕府の手当金二十両に対し自費八十両を費したが、この測量では六十両に増し収支はほぼ償うようになる。

和泉守は小笠原和泉守三九郎長信、以下石川左近将監忠房、中川飛弾守忠義、柳生主膳正道の四名は幕府勘定奉行で、「読史総覧」の江戸幕府重職一覧にその名を連ねている。美濃守は道中奉行であろうか。先触は道中奉行も発するからである。この先触によつて、村役人らは、出迎え、案内は当然の義務となる。

宛先の宿名からその径路が伺い知れる。一行の出立は六月十一日（新暦七月一〇日）、導線法による測量と夜間の天測を重ねながら、栗橋、宇都宮城下、白川城下、長沼、若松城下、松原、米沢城下、上ノ山城下、山形城下、新庄城下、下院内、横手、久保田（秋田）城下、能代（七月二十三日より日食観測のため十日間滞在するが曇天のため

に不成功）、大館、弘前城下、蟹田を経て三馬屋（三厩）へ八月十五日（新暦九月一日）に到着する。

4 一、北国筋海辺浦々測量為御用、伊能勘解由様

江戸御出立二付如此

御奉行様方御連印之御證文老通可被遣候間、則差越申候、先々無滞様相届、尤御印物二候間、墨附よこれ無之様、入念可被申候 以上

戊六月八日 御伝馬役

馬込平八 印

従千住奥州道中

白川宿羽州米沢上ノ山

津軽弘前より三馬屋迄

右宿村

問屋

名主

中

右の内容は、幕府御伝馬役より径路の問屋や村役人迄に、心得を通達したものである。印物につき墨よこれに注意とある。村名主は郡代、代官の支配下で大庄屋の下で村内民政を司った役人である。

5

覚

一、御触書老通 但当宿より米沢上ノ山

津軽三馬屋迄

一、宿々御請印帳一冊 右同断

一、御触書老通 三馬屋より出羽国より

越後国高田迄

右者、北国筋海辺浦々測量為御用伊能勘解由様

御通行ニ付、別紙之通御触書御出被遊候ニ付、御本紙之儀は、大切ニ存例之通り相封継送候間、墨附手摺等無之様、御継送可被成候 以上

戊六月八日

草鹿宿より

問屋左衛門

武州千住宿

奥州

白川通

羽川

米沢

上ノ山通

津軽

弘前より

三馬屋迄

右宿々

問屋

年寄

名主

組頭

中

三馬屋より越後高田迄御触書添書

一、北国筋海辺浦々測量為御用伊能勘解由様

江戸御出立ニ付、如斯

御奉行様方御連印之御證文老通被遣候間、

則差越申候、先々無滞相届、尤御印物ニ候

間、墨附よこ連無之様、入念可被申候 以上

戊六月八日 御伝馬役

馬込平八 印

從千住奥州三馬屋夫より

出羽国越後国高田迄

右国々海辺附宿村

問屋

中

名主

覚

一、北国筋海辺浦々測量為御用伊能勘解由様御

出立ニ付、御奉行様方御連印御触書一通当

宿ニ而、封し継送候間、奥州三馬屋迄無間

違御届可被成候

以上

武州千住宿

戊六月八日

問屋左衛門

草鹿宿より

奥州津軽三馬屋迄

宿々村々

問屋

年寄

中

以上三通、草加、白河、三厩の地名は異字を用いている。

千住の問屋左衛門が出した文書は継ぎ送りの文書である。三厩からいよいよ越後高田（第三次沿海測量は直江津まで）に向うことになる。三厩の庄屋忠兵衛から、小泊より秋田それより高田まで継送文書が送られてくる。日附は六月二十七日。忠敬出立は八月二十日（新暦九月一六日）であるから、前記のとおり、三厩に四日間、滞在したことになる。文中の同断とは同様の意である。

8

覚

一、御勘定御奉行様御触書御本帋 二通

但千住宿の封印之儘

一、御伝馬役馬込平八様御添触 二通

但墨附よご連数ヶ所あり

一、千住宿の添触 二通

一、宿々請印形帳 一冊

右御用状昨廿六日昼四ツ時從今則宿到来

即刻小泊宿江継送可申処風雨強ク御大切之御触

書、算用峠萬一の儀御座候而ハ、御申訳相立不

申候二付、今廿七日六ツ時小泊宿へ継送申候、

無遅滞先々御順達可被成候

以上

戊六月廿七日

津輕三馬屋

庄屋忠兵衛

從小泊秋田夫より

越後国高田宿迄

海辺浦附宿村

問屋

名主

中

9

御請印帳二

右 御讀文之趣、承知奉畏候、依之

御請印形差上申候 以上

戊七月十八日

越後国岩船郡岩船町

年寄

与惣左衛門 印

前書は六月二十六日（新曆七月二五日）は台風でもあろうか、峠越

えを心配している様子がわかる。萬一の儀御座候ては御申訳相立ち申さずとある。帋は紙と同じである。

後段は岩船町年寄が、到着の請印帳に受領拝見の捺印をしている。

10

伊能勘解由様御通行二付、覚

一、御勘定御奉行様御触書 二通

但千住宿封印之儘

一、御伝馬役馬込平八様御添触二通

但墨附ハ数ヶ所あり

一、千住宿の添触二通

一、宿々請印帳 老冊

一、同送状 一卷

右之通送遣候間、御請取可ヒ成候 已上

戊七月十八日

岩船町年寄

与惣左衛門

塩谷町庄屋

名左衛門殿

先の継送文書を、つぎの塩谷町年寄へ届けた記録である。ここまで

来ると大切な書類にも墨つき汚れが目立ってくる。そうこうするうち、

八月十九日発の出立前日の忠敬よりの泊触が到来する。

九月六日（新曆一〇月二日）のことであった。已上は以上と同義で

ある。

11

覚

一、人足五人

一、馬三疋 但内一疋は、人足式人二代ル

一、長持老棹 持人足

右者、我等儀、北国筋海辺為測量御用、明廿日

上下七人、奥州津輕三馬屋出立算用砂越小泊、
湯縁村々相廻、夫より十三湊江罷出、大間越、
出羽国岩館、是より測量手分致し、一組は海辺
男鹿通、一組は八郎潟通行、船越辺二而、両方
一同二成、久保田湊より越後国今町辺総而入海潟
縁二随ひ廻村いたし、高田迄罷越候条、道中御
奉行、御勘定御奉行御触之通、書面之人馬等聊
無遅滞繼立、且止宿渡川等差支無之様、執斗可
給候

一、泊宿之儀、雨天其外逗留之儀有之候間、
道中より追々可申遣候、尤測量道具据込候二付、
庭其外明地二而も十坪斗之空地有之候宿用意致
し、勿論支度は御定之木銭、米代相払候間、其
所取合之品二而、一汁一菜之外、馳走ケ間敷儀
決而被致間敷候、此先触早々繼送り我等高田着
候節相返可被申候

天文方

戊八月十九日

高橋作左衛門弟子

伊能勘解由 印

奥州津輕

三馬屋より

鯨ヶ沢

大間越

羽州

能代湊

夫より

男鹿道

越後国

土崎湊
坂田

瀬波

新潟

出雲崎

柏崎

今町

高田迄

右海辺浦々

名主

問屋 中

年寄

追而申入候、荷物繼送り候義、難所之場所有之
候ハ、長持馬付荷物は、勝手宜方を相廻し、
測量器物、並手伝人足は村役人差添、村境江罷
出案内いたし候、右躰之場所より前泊江罷出、
其段可申請候、測量之義、依路次、各別之里数
も難相成候間、止宿等之義被得其意、執斗可給候

忠敬よりの泊触について触れてみる。

八月二十日三厩を發ち、同行忠敬を入れて上下七名。上は勿論、忠
敬。中は門人平山郡藏（名は季恭二回目）伊能秀藏（三回目庶子十六
才）尾形慶助（二回目）大平雄助（初）で、下僕久兵衛と兵助であつ
た。能代から二手に分れ、一組は海沿い、他は八郎潟を測量し船越で
合流。郡藏は最も信を置く技術者で手分けするときの班長であつた。
しかし悲劇の人で後年、同行の幕吏との折合いが悪くなり、忠敬は泣

いて馬腰を切る形になり破門となる。久保田湊（土崎港か）からわが越後国は高田まで向うこと。道中、勘定奉行の先触のとおり、用意すべき人馬、渡川などに支障のないように取計られたい。泊り宿は、雨天順延もありうるから、途中の道中より申し遣わそう。測量器具（ここでは夜間の天測をいう）を据えつけるので、十坪ばかりの庭のある宿がほしい。お定めの木銭（宿泊料で薪代から来たことば）や米代は支払う。その地方の取合せの品で一汁一菜のほか馳走がましいことは決してなされぬよう。この先触を早々に継ぎ送りして、一行が高田に到着した時返されるよう、といった内容で、忠敬の人柄が偲ばれる。

追記は、継ぎ送りは難所もあるので、持参の長持や馬の荷は勝手のよい道を通し、測量器具や手伝人足は村役人を添えて村境まで案内、前夜の宿へ来て申し請け、順路によつては距離もちがうので宿の方はよろしくといった内容である。

12

右御先触九月六日亥下刻瀬波町より到来二付、即刻塩谷町江上町治郎助組与四兵衛、仙助、仁平次三人を以塩谷町へ継送候、右送書左之通り

覚

一、伊能勘解由様御先触 忝通 但箱入二而
一、宿々村々送り状 数通

右之通瀬波町より到来二付、即刻継送申候之間、御請取先宿へ御継送り可被成候 已上

戊九月六日亥下刻

岩船町

役人

塩谷町

前葉と同じく、早速次の塩谷町へ伝達している。情報化時代に入つた現代から見ると、大変なことであつた。

役人中

13

唯今立嶋組より飛脚到来、此之通注進申出候、天方昨夜湯温海泊二而、今十六日寝屋之方通行、同所泊二も可相成哉、其程は相知レ不申趣申来候、右様子に候へハ、別に案内等も無之通行有之候事と相見へ候、右日程二而は明日方此方通行可有之哉、依而先々聞合候は指出、且又出迎、宿用意等之義も無差支様、御取斗可有之候、此段申達候

以上

九月十六日

木野村勇助

瀬波町岩船町

年寄中

塩谷町桃崎浜

庄屋中

追而塩谷、桃崎両所江申達候、差懸り候事故、大庄屋へは不申達候、其方より大庄屋代之者罷出候様、取斗可有之候 已上

木野村勇助は村上藩士である。藩の勘定方に属したのか。立嶋組の大庄屋よりの注進について、藩内の海沿いの町、村に達しが出された。今明日中にも郡内に入るであろうと、緊張感がにじみ出ている。

(つづく)

(かざま ひろきち・元新潟県立桜ヶ丘高等学校教諭)

伊能図にみる国際性の試み 辻本 元博

会報42号で矢口彰国土地理院長のご紹介にありました堺の発言者とは小生です。編集部からの質問にお答えします。以下発言要旨です。

大小路あたりからの視準観測

伊能忠敬測量隊が各地で測量した山や島への方位角を記した「山島方位記」(全67巻)の中に伊能測量隊が当時の堺燈明下から金剛山その他遠方の方位を測った方位角が記載されております。「大阪春秋」76号、中井正弘氏の「江戸期の堺港燈明台の変遷」によれば、昔の堺の燈明(一種の灯台)は何度か位置を変えておりますが、伊能測量当時の燈明は大小路通りの最も西の方で、現在の南海電鉄本線堺駅の東正面ロータリー、南東端付近の道路に架かる勇橋の北詰めにあったとされております。

全く不思議で信じられない様なことですが、なんと伊能忠敬一行の堺での宿泊場所は伊能忠敬測量日記にも記載されております。一体伊能測量隊は堺ではどこに宿泊したのか、わかりません。

それだけに山島方位記に記載の堺に於ける伊能の記念になる場所、且つ当時の堺での磁針偏角の解析に有効な場所としてご紹介をさせていただきます。

山島方位記の重要性

同時に伊能の成果は「伊能図」にとどまることなく「山島方位記」があり、「山島方位記」を解析することで、今後、地磁気偏角、地誌、

歴史等の研究上重要なデータが得られること。

特に「山島方位記」に記載の各地での方位角から地磁気偏角の解析が為されると、過去約一世紀分の我が国自前の観測による地磁気データを一気に過去二世時点紀迄遡って拡充することになるだけでなく今後永く有効なデータとしての活用可能性を有していること、現在小生は解析中であることを述べました。

国際地図の試み

伊能図に掲載の朝鮮(現在の韓国)の山名、島名が実際にはどの山や島になるのか同定作業をしながら、山名、山々の絵姿、対馬からの方位角を考察しました。

「山島方位記」「測量日記」と受け入れ側対馬藩の「測量御用記録」(伊能忠敬研究会入江正利氏簡約)及び朝鮮通信使、対馬藩の釜山倭館関係、対馬の郷土史等々の書籍を読んで測量時の背景をも含めて考察してみました。ここでは当日の発言に補足を入れてご説明致します。

特に対馬からの朝鮮測量の意図に触れた書付等は見ないものの、従来から言われている対馬からの朝鮮測量の目的は単に日本の国防の為に対馬海峡の巾を確認する目的、或いは対馬の測量を正確にする為という概念だけでは語れないのではないかと考えるに至りました。

片側測量ながら科学的測量による海洋越しの国際測量により、日本からアジア大陸の朝鮮を測った国際地図(言い換えれば水深表示の無い国際海図)の試みを兼ねた地図であったことは、認識しておくべき大事なことといえそうです。伊能図中の朝鮮の山々の山名は韓国の港邑名や島名を冠した表現になっており、当時の日朝間の航海の実用に向いた地図といえます。

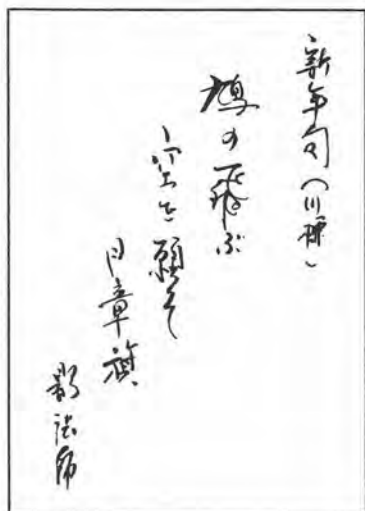
当時は鎖国時代にもかかわらず隣国朝鮮とは朝鮮通信使等々で最友好国関係にあり、日朝間の航海を安全且つ的確にすることで具体的相互利益の創出に寄与する最初の画期的な国際地図の試みを兼ねた地図といえます。(迫り来る西洋植民地主義から隣国共同して対馬海峡を守ることも念頭にあったのではなからうかとさえ思えます)

幕府の秘匿後、伊能図が実用に供される様になった十九世紀末には日本も帝国主義植民地主義諸国の中に入り日朝関係が暗転していたことは実に残念の極みといえます。

最後に、科学的測量による日朝間の国際地図を兼ねた地図としての伊能図の性格を再認識することと、西暦2005年の「日韓友情年」に際して伊能忠敬測量隊が示した本来あるべき隣国同士の友好関係を学び今後活かそうと述べました。

尚、伊能図に掲載の朝鮮の山々の同定内容については改めて投稿させていただきます。

(つじもと もとひろ・国際地図学会員 新入会員)



宮城県 船形山晩秋
古川市 武川芳男・影法師



古四王神社の注連縄 新発田市五十公野
新発田市その周辺には両端を輪に巻いたしめ縄が多い。
注連縄研究会 主幹 大友正道

旧ホームページを終えて 大友 正道

伊能忠敬研究会のホームページ（以下HPとする）は、秋場会員のお骨折りで、昨年（2005年）3月から刷新された。綺麗で見やすく何より項目別に見たいものがクリック出来る明るい画面となった。それから既に半年以上が経ち、遅きに失したが、当初からHPに携わってきた者として、過去を振り返ってみた。

会報26号で報告したが、97年当時会員数が120名位で伸び悩んでいた頃、更に会員を増やしたいと、渡辺会長からHPを作ってPRをしては、との意向があった。当時私はパソコンを始めたばかりで、怖いもの知らずに、私がやってみますかと気安く云ったものの、それからが大変であった。今ではHPに簡単に交換できるソフトがあるが、その頃はそのようなものが無く、暗中模索、全くの自己流で立ち上げた。従って稚拙であり、表現すべき事もままならず、中途半端に妥協せざるを得ない結果が多く、内心忸怩たる思いで過ごして来た。

会員増強が目的なので、努めて平易に心掛け、活動状況、イベント等を簡単に紹介したり、入門書の案内を載せたりした。しかしそのHPを見て会員になられた方は、恐らく皆無ではないかと反省している。漸くHPが何とか出来上がったのは2001年1月で、21世紀の幕開けにふさわしい「伊能ウオーク」が完遂された直後で、まさに伊能忠敬ブームが高まってきた時であった。

更に2001年6月、渡辺会長自ら米国議会図書館で、伊能大図206枚が存在する事を確認された。この図書館ではその重要性を認識して

いなかったが、ただならぬ貴重な伊能大図である。伊能大図は国内で60枚ほどしか現存されていない。これは一大発見・大事件であった。その後も各地で伊能忠敬図の発掘があり、特に東京国立博物館で未発見の伊能小図が報じられ、報道の都度HPのヒット数も伸びた。

2003年フランスのペイレ氏所蔵の伊能中図が、ボロボロである事が大きな問題となった。これも大きく報道をされ、結果は日本写真印刷の積極的な厚意により無事修復も完了。しかもその中図は、ペイレ氏より日本写真印刷へ譲渡される事になり好結果で結ばれた。

そのような事実の展開する中で、HPのヒット数も日ごとに大きな変化はあるものの、確実に伸びていた。それを月単位にまとめ、グラフとし次頁に掲載する。（データ計測ソフトはSUMNET）

顕著な特徴として9月10月が際だって多い事である。他の月の5倍以上である。しかも、毎年同じパターンが繰り返されているのは、どういう事か。毎年9月10月に特別の催し物とかトピックスが多いとか、関連づけられる事項など私には判らない。何故9月がダントツに多いのか。想定される理由などがあれば、是非お教え頂きたい。

HPの閲覧は、深夜族とかオタクとかが、夜中に開くのではないかなと思っていたが、実際は平日の昼間が圧倒的に多く、土日は極端に少ない。出勤した人がデスクに向かって、先ずはHPを開いて見るのではと想像する。午前11時頃が毎日共通して多いのも面白い現象である。

その後、前田幸子会員がHP「伊能忠敬図書館」を作られ、単行本、雑誌・論文の項目に分け、丹念にリストアップされている。その他に写真資料室と題して、伊能忠敬に纏わる史跡探訪が添えられ、平易なので、多くの方に見て欲しいものである。また、坂本魏会員の「資料室」

は、米国議会図書館の伊能大図の写真を始め、伊能図の目録・文献をすべて収録している。

私のHPは進歩どころか、益々陳腐化していくのを肌で感じ、選手交代を求めている処、一昨年秋、渡辺会長から秋場さんを紹介された。秋場さんは私より50才位はお若く、HPにも詳しい方で、早速パトントンタッチをする事が出来た。これから新鮮な取材をされて、内容の濃いHPを仕上げてゆかれる事と信ずる。

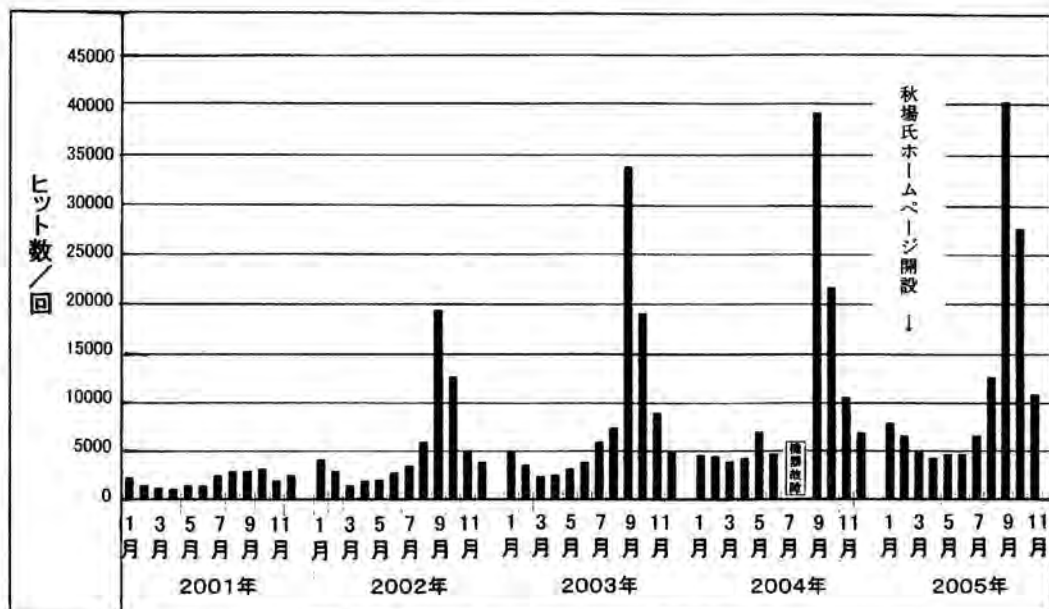
現状の私のHPには、『伊能忠敬研究会公式HPは移りました』と明示し、クリックすれば秋場さん作成のHPに繋がるようにしてある。

しかし、私の作成した旧HPは、下図の如く昨年3月パトントンタッチした以後もヒット数が多くなっている。例えば現在も「Yahoo」とか「Google」の検索ソフトで、「伊能」と検索するだけでも、必ず「伊能忠敬はどんな人であったか」の旧HPが、佐原の伊能忠敬記念館のHPと肩を並べて、トップに出てくる。従って従来の私の旧HPを全く消滅しようと、伊能忠敬研究会のHPを開こうとする読者の多くが、迷う事になると思う。現段階では道案内の役割としても残した方がよいのではと、暫くは残す事をお許し頂きたい。

ヒット数は日々変動するが、確実に右肩上がりの成長をしている。このヒット数の実績は、渡辺一郎前代表の功績と、伊能忠敬研究会発展のしるしである。

それにしても、何も知識のない老碌が、渡辺さんはじめ会員の皆様のご支援の賜で、一応の成果を得たと思うのは、自己満足であろうか。感謝一杯で御礼申し上げます。

(おおとも まさみち・顧問)



月別ヒット数(旧ホームページの接続件数)

埼玉県下に忠敬さんの足跡を探す 加藤 巷児

私の勤務先が青梅市にあった関係で、毎日の通勤は埼玉県入間市扇町屋の通りを利用していました。入間市博物館の常設展示図録によると、扇町屋村は、青梅、川越、江戸、八王子などに行き来する道が合流する交通の要衝であり、村では江戸時代初期から三と八のつく日には六斎市が立ち、米や雑穀を扱う穀市として名を馳せ、江戸時代後期には絹織物や綿織物なども取引され、市は在方商人で賑った町とあります。

測量隊は、第九次測量の際、文化十三年三月二十六日（西暦一八一六年四月二三日）「三辻、右川越道、左日光街道追分打止め⑤印を残終わる。八ツ時頃着。止宿組頭太七」とあります。（佐久間達夫先生校訂の伊能忠敬測量日記によるー以下同じ）

扇町屋村は、前述の常設展示図録によると、市に商売にくる若者達が風紀を乱して困ると近隣の村名主が文化十一年に役人に取締まりを陳情した書状が残されているとあります。入間市史など、博物館の資料を散見しても忠敬さんに関係するような記録が見当たりません。

測量日記によると、測量隊は、第一次から第四次、第七次から第九次と計七回の測量行に際し、埼玉県下で五十一日宿泊した記録があります。

一九九九年二〇〇〇年に実施された「伊能ウオーク」は全国に忠敬さんの名前と業績を再認識してもらうすばらしい行事であったとともに

に、全国各地から、あらたな記録の再発見にもつながったことでした。この事実は、どうも西高東低の傾向があるように思えます。そこで、東側でも少しがんばらなければなどと考えました。「伊能測量隊東日本をゆく」という渡部健三さんの著書もありますが、測量隊の通った道も多く、またその際、各地の人達とのふれ合いも多かったと思います。そのなかのなにがしかは、各地の地元にも埋もれているものも多いように考えられます。

このためには、多くのひとに、埼玉県下の忠敬さんの歩きを知ってもらい、発見の糸口にできないかなと考えました。

そこで、佐久間先生の測量日記から、埼玉県に関わる次の資料を整理しました。

- ① 埼玉県下の測量日記
- ② 埼玉県下の宿泊地
- ③ 測量・宿泊町村一覧表
- ④ 埼玉県関係地名変遷資料
- ⑤ 地図に測量経路の記録

これは、私が以前、飯田橋の研究会事務所のお手伝いをしていた二〇〇〇年頃から始めました。これで一番苦労したのは⑤の地図におとすことでした。最初、伊能中図で試みましたがときたま手持ちの「明治二十二年版・埼玉県全図」があり、村名・字名がほぼ江戸末期のものが多く残されていることに気がつき、これを利用いたしました。

こんなことをしているうちに三、四年経ち少し時間もとれるようになりました。二〇〇五年十二月に、埼玉県立博物館に主旨を説明、資料を送りました。三、四日経って同館資料調査担当の方から、厚意的なご返事をいただきました。

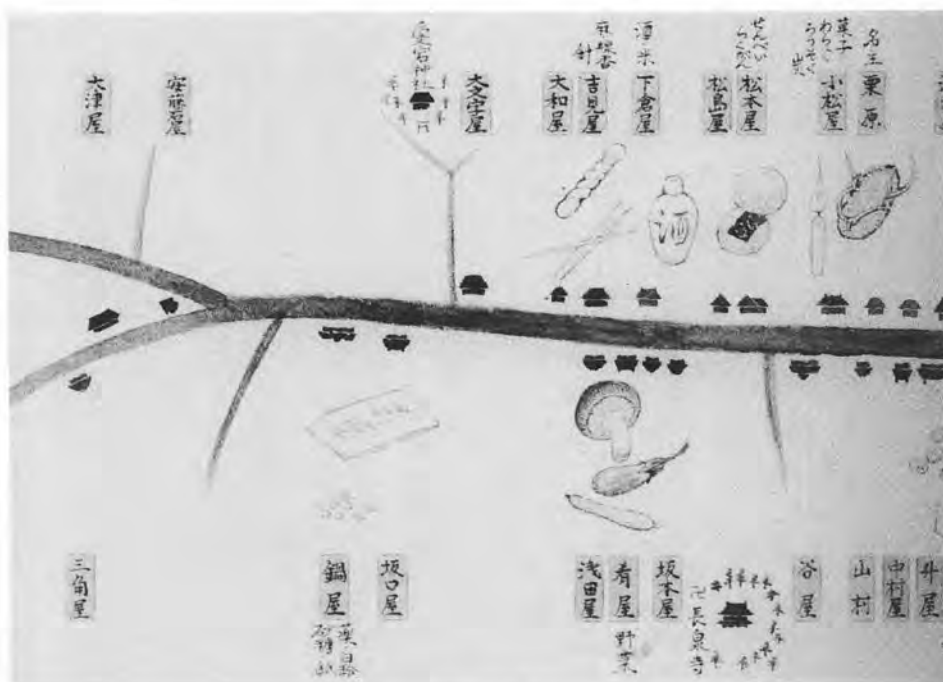
まだ、これから先の展開はどうなるか分かりませんが、博物館でフ
ロアー展でも実施でき、それが県下の「起爆剤にならないかな」など
と考えています。

今年一月から、地元狭山市立博物館で、「歴史講座・狭山の古代か
ら中世まで」というのが実施されます。いの一番で申し込み参加でき
ることになりました。シニア向け野々村さんの地図講座ともども楽し
みにしています。私は元来無趣味で、地元の老人クラブなども参加す
る気はなく、ただ、一九九九年から博物館巡りをしているくらいです。
会社勤めをしているときは、出張の合間をぬってといえは聞こえが
よいのですが、時々さぼって、その土地の博物館を見物していました。
地元の博物館などは、20回以上（講習会など含め）のところもありま
す。伊能忠敬記念館をはじめ、鎌倉、古河、山梨、都留、苦小牧、博
多、箱根、富山、福島、札幌、小樽などをまわりました。県下の博物
館では何か企画展があったり講習会があったりすると、暇をみて参加
しています。それが、昨年の11月で80回に達しました。参観する度に、
感想やら、駄文を残しています。

（かとう こうじ・元事務局応援）



日光脇往還の道筋
八王子～日光
表紙図解説参照
入間市博物館



扇町屋村の家並図・入間市博物館

坂部貞兵衛と遣唐使遺跡

——伊能測量隊の足跡・五島列島福江の旅——

石川 清一

昨年10月21日、22日、6回目となる九州支部毎年の研究旅行で福江に行った。当日参加者は各自のルートで現地福江港に集合することとした。北九州遠賀町の中富道利氏は福岡空港から、福岡から野田茂生氏と小生、佐賀から松尾紀成氏の三人はJRで長崎へ、佐世保の平川定美、島原の松尾卓次両氏も長崎港に合流。高速船ジェットフォイル「ベガサス」で一路福江へ。当日は晴天で波静か。揺れもなく時速80km、一時間半の船旅を楽しんだ。

港では福江在住の的野圭志会員の出迎えがあり、間もなく空港から中富氏も到着し一行7名全員勢揃いと相なりいよいよスタート。かねて五島は、あじ、ぶり、うに、アワビなどなど魚がおいしいと評判で昼食の「さしみ定食」の魚も肉厚たつぷり、さすが本場に来たと実感。

昼食後早速港近くの福江城址を訪ね「五島観光歴史資料館」所蔵の坂部貞兵衛の手紙を拝見した。一通は額装され館内に展示公開中、残りは一通ずつ封筒に入っており学芸員の解説を聞きながら拝見させて頂いた。虫食いがかなり目立ち、素人でよくわかりませんが保存方法をもう少し考えられないかと思った。この貴重な手紙は以前伊能ウオークが行った頃、伊能洋・陽子さんご夫婦の英断で、貞兵衛に一番ゆかりの深い福江市に寄贈されたものと伺っており一度見たいと思っていたものです。

次いで今回の目的の一つの坂部貞兵衛の墓所、浄土宗芳春山宗念寺に行き一同墓前に花を供えお参りした。17年に及ぶ全国測量中唯一の犠牲者が出る不幸に出合い、忠敬先生は「鳥が翼を落としたように」大いに悲しみ力を落とした。五島藩も43才で生涯を閉じた貞兵衛の死を悼み三日間歌舞音曲を止めたと伝えられている。我々一行は更に市内浜町にある「天測の地碑」や、市外に足をのぼし、全山が荒におお



伊能忠敬天測之地 五島市福江にて

左から平川 的野 松尾(紀) 中富 石川 松尾(卓) 野田の皆さん

われた美しい「鬼岳」や鑑瀬（あぶんせ）の溶岩海岸を見物した。福江は思っていたより温かく、的野氏によれば島は大半が常緑樹で、秋になっても紅葉が見られないとのこと。これは近くを暖流が通っているからのようです。その夜は宿で大いに歓談。的野氏の話も熱が入り魚もうまく、酒もうまかった。五島ではこれから「きびなご」がおいしくなる季節とのこと。昼に的野氏云々、夜の食事にもきつと出ますよとの話し——その言葉通りで、一同旬の美味を堪能した。

二日目はジャンボタクシー（9人乗り）で測量隊の足跡を辿った。忠敬先生も苦勞した三井楽町の「姫島」をのぞむ遣唐使遺跡の前では空海が渡唐する際日本最後の見納めの地に立つ『辞本涯の碑』にしほし冥想。（碑文は空海の書から引用されており、日本の果てを去るの意）古代五島は中国渡航の要衝の地であり一時期遣唐使船もこのルートを通った。はるか東シナ海をのぞむこの台地に立つと、当時の幼稚な造船技術、航海術で決死の覚悟で海を渡ろうとした人達が、今生の見納めになるかもしれぬ祖国最後の陸地に、船から別れを告げたであろう情景が万感にせまり胸をうつ。

次いで玉の浦町の「大宝寺」を拝観——空海が唐より帰国し真言宗を伝えたといわれ、境内には600年前の鐘（県文化財）など貴重なものも多い。島内は「水の浦教会」など多くの教会も残っており隠れキリシタンの里の多い。福江島は昔から歴史の宝庫だった。

伊能忠敬の五島測量は第八次全国測量（九州第二次）の文化10年（一八一三）5月23日から7月19日まで二ヶ月余を要したが、今回測量隊の足跡の一端を訪ねてみて峻険な海岸や多くの島からなる五島の測量は70才近くになった忠敬先生にとって大変心身共に疲れの多い測量行だったと思われる。現地にきてご苦勞のほどがあらためて偲ば

れました。

この旅行では島在住の的野さん（五島文化協会会長）の五島の全てを熟知された解説付きで大変充実した旅でした。ありがとうございます。厚く御礼申し上げます。又松尾（卓）さん、平川さんお二人がお若い時長崎県教員としてこの地に赴任、教鞭を執られた思い出の地とのことで、折々生活した人ならではのお話しが聞けて大変良かったです。お三方ありがとうございます。

（いしかわ せいいち・九州支部長）

閑話休題

さて皆さん

① 次の字（魚の名前）はどう読みますか
——「鰻」

② 次の魚は九州以外では何という魚ですか——「あじ」

答は72頁です。

写真

三井楽「辞本涯の碑」にて



三浦半島に忠敬の足跡を歩く

白根 貞夫

伊能忠敬の日本国海岸線の測量は、多くの人が御存知であるが、日本測量の念願をもって始められたものではなかった。

彼は五十歳までは、千葉佐原の醸造業を主とした町屋で家業に精出し財をなしたので隠居し、子に譲った。早速江戸へ出て高橋至時^{たよし}の門に入り、天文暦学を学んだ。五年後地球の大きさを知りたく、緯度の一度は何程かと求めようとした。時に寛政十二年（一八〇〇）北のロシアの侵寇があり、北辺の測量を願出て、その折一度の距離を求めようとした。

第一回の測量は、同年閏四月十九日（洋暦5月11日）に忠敬以下六名で江戸を出発、蝦夷地根室の西北、西別村には八月七日（9月25日）に着いた。直ちに戻り、松前には九月十八日（11月4日）に、江戸へは十月廿一日（12月7日）に着いた。蝦夷地をもっと測量したかったが、冬將軍が迫っており、悠長なことではしておれなかった。幕府へは報告書と、地図22枚（小図1枚、大図21枚・註1）とを提出した。この時の費用、幕府から二十二両余、忠敬の個人負担は百両余と言われている。

その翌享和元年（一八〇一）幕府から、相模・伊豆・房総から陸奥までの海岸線測量を命ぜられた。今回も忠敬以下六名で、四月二日（5月14日）出発。四月十日（5月22日）相模浦郷村から測量を始め、二十日（6月1日）には小坪村に達した。この間夜の宿泊は、十日浦郷、十一日横須賀、十二日走水、十三日西浦賀、十四日上宮田、十五

本稿は昨年、三浦半島の文化を考える会編「三浦半島の文化」第十五号掲載のものに加筆したものです。

編集部

日三崎、十六日下宮田、十七日、十九日佐島、二十日小坪である。

筆者は、これに倣い、浦郷からほど忠敬が歩いたと思われる道を歩いた。この間、特に三崎附近は海岸線が入りこんでいるので注目して歩いてみた。前述の四月十六日（5月28日）の項である。

測量日記を抜粋する。「十六日朝曇六ツ半頃三崎出立、城村、二町谷村、諸磯村、網代村、三戸村、下宮田村八ツ半頃着」とある。

この日の日出（4時28分）日入（18時49分）。これから割り出すと、朝六ツ半は5時40分、午後八ツ半は15時13分、所要時間は9時間33分となる。筆者はこの間の当時の海岸線沿いに歩いた。昨年4月27日、5月18日及び24日の三回である。

4月27日晴、三崎北條湾（朝10時33分）から南へ折れて西へと歌舞島經由二町谷の見桃寺に着き、向井兵庫正綱らの墓に一札を捧げ歩みをつづけた。「写真①」海外付近で漁師に諸磯の浜は歩けますかと聞いた。千潮なら歩けるよとの答があった。多少の難儀はあったが、諸磯神明社に（12時48分）着いた。知人と昼食のため、一休止。

午後再び歩み出し（15時5分）、12分後にはコンクリート護岸の京急マリーナとなった。眼前の諸磯にはヨットが多数ならびカメラマンが大勢写真をとっていた。

C半島（第1図参照）につづき、B半島の南岸を進んだ。この半島には東西と南北に二つの隧道があり、あちこちに人工洞穴がある。聞



向井三崎舟奉行の墓

①三崎二町谷見桃寺



右折する付近の狭い道

②A半島先端 東大試験場から北上

けば前大戦中特攻兵器の組立・実験の地だった由。造船所があり更に進んで対岸に東大臨海研究所の向かい迄進んだ（15時50分）。これ以上磯伝いができない状況だった。戻って切通りの北、三崎マリン構内を通り（16時50分）半島の北側を進んだ。やはり苦勞した。向かいの検潮所の正面迄（17時5分）歩いて進めなくなった。この日はこの半島の尾根へ出て、油壺入口バス停まで歩いた。

5月18日晴、三崎マリン入口（12時57分）から、A半島の南側に沿い歩き始める。油壺ポートサーピスまで来たが、その先へ進めそうにない。地図には細い道があるように書いてあるが実際にはない。5分程上のバス通りの方へ登ってゆく。バスの終点を過ぎ、左手に油壺

験潮場入口とあるので下りてゆく。岸辺に立ち（13時24分）釣り人と言葉を交わした。黒鯛を釣っている由。西の方へ百米位進んで戻り、尾根道を西へどんどん進んだ。先端迄行くと、東大臨海研究所となり、浜へ下りた。（13時54分）、城ヶ島への遊覧船が発着する所だった。南東方向へとまわり、B半島の歩けなかった岸辺を眺め、戻りながら北方向へ、更に東の方へ折れた。〔写真②〕この浜では釣人が大勢出て糸を垂れていた。三浦道寸墓の下あたりから東へ向かい、やっとの思いで磯辺を歩いたが、残念ながらシーボニア（海岸沿いのマンシヨン群）へは辿りつけなかった。（14時40分）戻って尾根道を歩き、シーボニアへと下りて行った。

シーボニアの西端に着いた。（15時10分）東に向かって進み、永昌寺・海蔵寺を横に見ながら、白髭神社に達した。（15時42分）この漁師に聞いた。「小網代の湿地帯を磯伝いに歩けますか」「白髭から山の方へ向かい進み左に折れると浜に出る」と言われた。地図を見ると大分廻り道となるので、できるなら白髭から磯伝いをしたかった。神社の隣に造船所があり、従業員に通させて呉れと頼んだら、気持ちよく「気をつけて歩いて下さい」と言われた。造船所の先は既に湿地帯で干潟になっていた。アカテガニの生息地として生物学の大切な場所の由である。〔写真③〕

なるべく岸伝いに行こうとしたが、しばらくして行けなくなつて戻り、山の中の小径を西へと進む。所々湿地帯でとても歩きにくい、危険性はないが、踏み外すと靴の中に泥が入りこむ気がした。やっとのことで湿地帯を抜け別荘の並ぶ浜辺を歩いた。本式の中世のヤグラがあった。別荘は殆ど無人らしく標札のある家は稀である。もとS銀行寮とある所でやっと辿りつき（16時48分）それ以上進めないの上の方へと登った。M作家邸を左手に眺めながら、降りる道を下り浜へ

出た。〔写真④〕(17時2分)先程のS銀行寮近くまで進み引き返した。たゞ浜辺を北へと進み、三戸浜へと出た。ここはお盆明けの時おしよる舟が出る所で有名である。浜伝いに歩いて諏訪神社に至る(17時38分)。本日はここまでで帰宅。

5月24日晴、前回の諏訪神社に着き(10時20分)、直ちに海岸を伝い北上。この海岸は約一年前に歩いた経験があり様子が判っているので安心だった。

この浜はとりたてて言う程の特徴はない。北に向かい、約30分で黒崎鼻に着く。岩がこつこつしているがとりわけ苦労する程でもない。

③小網代の海岸

アカテガニの生息地といわれている



④M作家邸の下の海岸近く

この位の岩なら歩行の苦労は少ない



東に折れ10分余たつと人里で、実相寺・延寿寺の前を通り、11時30分には、国道134号線に着く、下宮田である。

実際に海岸線を歩いてみると、舗装した道路の倍の時間がかかることになる。個人で歩いているから多少気ままな点があり、速度が遅くなることはお許し願いたい。

しかし、忠敬は、歩くのではなく測量である。六人の者が手分けして行うのであろうが、よくこの速さで測量できるのか実体を知りたい。海岸だから高低の差は少ないが、方角は精密に出さねば地図にならない。宿へ着いてから、その日の測量結果をまとめねばならない。また途中の景色の要点を記録しておいて地図上に表現する。あれやこれやと地図作成上の要点をすべて記録しておくことになる。

<速度計算>

1. 忠敬

享和元年4月16日 三崎→下宮田
 $16.1\text{km} \div 9\text{時}33\text{分} = 1.69\text{ km/時}$

2. 白根(筆者)

昨年4月27日 北條湾→三崎マリン
 $6.75\text{ km} \div 3\text{時}15\text{分} = 2.05\text{ km/時}$

同 5月18日 三崎マリン→三戸諏訪社
 $6.95\text{ km} \div (1\text{時}10\text{分} + 15\text{分}) = 2.06\text{ km/時}$
 (+15分はA半島南側 歩けなかった所
 約400mを15分で歩いたと仮定)

同 5月24日 三戸諏訪社→下宮田
 $2.40\text{ km} \div 1\text{時}10\text{分} = 2.06\text{ km/時}$

一昨年十二月、伊能大図214枚の展示会が東京世田谷の日本大学で開催された。筆者は出かけ、許可をもらって三浦半島の海岸線を製図用紙に写させて頂いた。それと国土地理院の地図とを、三崎北條湾から、下宮田迄の間について見くらべてみる。(第3図参照)

1 歌舞島付近250m、海岸線が東寄り

2 C半島、250m南寄り

3 A半島とB半島とが一体となり、400m南寄り

4 三戸村の西海岸線の形状が異なり、入江新田が500m南寄り

その他、三浦半島全体として、東海岸と西海岸の相互関係がずれており、鎌倉あたりは1分30秒(約二五〇〇m)南寄りである。

私は、伊能図が陸地測量部地図の未完のうちは、暫定的に使用されたと聞いており、両者に大きな誤差はないとの感じをもっていた。しかし、この二つを詳細に見てゆくと、前述のようになりの誤差を生じている。忠敬は毎夜晴れていれば星を数十個測定して緯度をたしかめた。しかし、経度については、良質のクロノメーターがなく僅かに月蝕・日蝕の時刻を同時に離れた二地点観測を行い出したといわれる。これは天候に左右されることが多く、至難の仕事だった模様。

享和元年(一八〇一)四、五月に相模・伊豆の海岸を測量したが、六月以降千葉市川の海岸から房総・常陸・陸奥へと進んだ。今の陸中海岸線は複雑で風光明媚と言われるが、測量は大変であった。この時作成されて地図を陸奥図と比較してみると、出来具合は三浦半島とほぼ同等である。しかし、幕府は北辺防備の点から有効であると喜んだようである。

先の第一次蝦夷地までの測量と、第二次陸奥國への測量により、忠

敬は地球緯度一度の長さは一一〇・七kmと出した。今日では一一〇・九kmと言われており、その精度は驚く外はない。(註2)

以後、忠敬は第十次に至る迄全国を歩きまわる。第八次は九州一帯で、文化八年(一八一二)から十一年に亘る900日以上になる大変な測量だった。普通の地図を開くと、対馬や五島列島の島々がとても複雑な形をしていることが判る。19人が従事したが五島福江島では忠敬が最も頼りにしていた坂部貞兵衛が死去したという悲しいものだった。

三浦半島の地図に比べ、とても正確に書かれている。既に測量開始以来十余年経ち、人員増強・経費の幕府負担・諸大名の援助などすべてが向上して来た。それにより、一層精度の高い地図となつて作成され、大切に保存されて来たのである。しかし残念ながら幕府に提出した原本と伊能家に保存されていた副本とは何れも焼失。今あるのはその他の複製品であるが、残された文化財の地図を後世に伝えるのは私達の義務である。

(つづく)

註1 伊能図には、大中小の3種あり。

大図Ⅱ三万六千分ノ一。全国で214枚。

三浦半島の出ている図は縦一m×横一・六m
中図Ⅱ二万六千分ノ一。全国で8枚。

小図Ⅱ四万三千分ノ一。全国で3枚。

註2

江戸から北へ奥州街道は比較的直線に近く、1度の距離測定に向いていると忠敬は考えて測量した。

江戸深川から陸奥野辺地まで、緯度差5度12分。1度を二十八・二里と出した。(メートル換算で二一〇・七km)

(しらね さだお・元機械技師 横須賀市在住)



第2図 伊能中図 (縮尺 1:200,000に拡大)

「阿蘭陀風説書」の写しではないかと思つて、図書館で調べてみたところ、予想通りほぼ同文のものを発見した。

「オランダ風説書 第二二三号風説書 参考史料其二」で、文化五年（一八〇八）六月、幕府受取りのものであった。

（参照『和蘭風説書集成』下巻 一二五頁）

この年までのナポレオン戦争の概略（オランダ関係）は、次のようなものである。

一七九五年（寛政七）フランス革命軍はオランダに侵入し、総統オランエ公ウィルヘルム五世をイギリスに追放した。オランダはバタビア共和国となり、革命フランスの勢力下に加わる。

一八〇四年ナポレオンは皇帝になり、ヨーロッパ中の王国を嵐のような戦いの渦に巻き込んだ。一八〇五年オーストリア・ロシア連合軍をアウステルリッツで破り、一八〇六年第四次反仏同盟の主力プロイセンを圧倒して、破竹の勢いでベルリンに入った。同じ一八〇六年、バタビア共和国はオランダ王国となり、ナポレオンの弟ルイが、国王になった。

そして一八〇七年ロシア軍とも戦火を交え、講和条約を結び、ナポレオンの大陸政策を承認させた。彼はこの年の夏、ヨーロッパに平和をもたらした勇者としてパリに凱旋した。

ナポレオンの全盛期である。

この風説書の年（一八〇八年）はオランダにとつて、ナポレオンが皇帝になって四年目、国王に弟ルイを迎えて二年目、フランスに完全に併合される二年前に当る。

「風説書」の情報は遅れるのが普通で、「去夏頃より」で始まるこの

「風説書」は、約一年前の一八〇七年までの情報である。戦況報告はほぼ正しいが、オランダがフランスの同盟国であるかのような書き方は偽りであることが分かる。この時点ではフランスの属国であり、二年後には併合されて、国そのものがなくなってしまうのだから。

フエートン号事件

この「風説書」を六月に受取った幕府は、二カ月後の八月、太平の夢を楽しんでいる鎖国日本に大きな衝撃を与える事件が起ころうとは、この風説書に書かれているヨーロッパ大乱の津波がさっそく日本を襲うことになるとは、夢にも思わなかった。

八月一五日、政府の命を受けたイギリス軍艦フエートン号が、オランダ商船の捕獲を目的として、突然長崎港にその姿を現したのである。

フランスの属国になり弱体化したオランダを、イギリスは見逃さず、東南アジアの蘭領植民地を侵攻し始めた。

マストに翻るオランダ国旗を信じて、長崎奉行所々員と通詞は、オランダ人商館員二名と共に來航船へ出向いた。軍艦からもボートを下ろし、近づくや否や武装したイギリス兵士が乗り込んできて、オランダ商館員二名を本船に拉致し、たちまちオランダ国旗を下してイギリス国旗を掲げた。艦長は商館員の証言により、オランダの商船は来ていないことを知ったが、夜に入って長崎港内を搜索し、危険を感じた商館長ブーフは長崎奉行所に逃げ込んだ。

長崎奉行松平康英は戒厳令を布き、警護役の鍋島・黒田・大村藩に出兵命令を下した。イギリス軍艦は、食料供給を条件に、オランダ商

館員を釈放してもよいと伝え、商館長ゾーフも開戦不可を進言した。

長崎警護の職にあった三藩は太平に慣れて守備兵の多くは帰国しており、他の諸藩にも派兵を要請したが参着せず、日本側にはイギリス軍艦と戦火を交えるに足る武力がなかった。奉行所は食料と引替えにオランダ商館員は取戻したが、イギリス軍艦に何の報復もくわえることが出来ず、むなしく帆影を見送るのみであった。

奉行松平康英は、奉行所で自刃し、一封を残した。国威を辱めた罪を謝し、直属の武力を持たない奉行の苦衷を述べたものであった。次いで鍋島藩の家老等数名も自刃した。長崎の人々は奉行松平康英を悼んで、長く語り継いだという。

こうして文化五年の事件は一応落着いた。

前掲の「風説書」を読んでわずか二カ月後に起こったこの事件で、幕府は、ヨーロッパ諸国の出足のすばやさ弱肉強食ぶりを実感したことだろう。もちろん詳しい事情は、一般の人々には知らされなかった。

長崎での買い物

五年後忠敬が長崎に入った文化一〇年八月は、まだオランダは併合されていて、国そのものがない頃で、商船の入津も途絶えていた。

忠敬は長女妙薫から、長崎で毛氈の購入を頼まれていた。

彼女は、ライバルだった永沢家が舶来の毛氈を持つているのを気にしていたのである。『お聞き及びかもしれませんが、オランダ船は、ここ三年ほど入港なく、長崎もたいへん難儀をしています。葉もオランダものは三、四倍の高値の由。一応承知しましたが、手に入るかどうか、おぼつかない次第です。』と手紙に書いている。

七月初めには、『オランダ船二艘入津の由、私も運よく長崎入りします。長崎も繁盛で、上も下も大喜びと思われます。これでロシアのサワギも鎮まり、世の中も静かになるでしょう。』と書いた。商船が再びやってくるのは、ヨーロッパの大乱が収束したからだと勘違いしたのである。

しかしこの二艘の船は、実はイギリス船であった。オランダの植民地がイギリスの手に落ちたことを隠しておかないと日本では商売が出来ないため、英・蘭のバタビアの出先が共謀してオランダの船を装って入港して来たのである。

やがて忠敬は、値段も高く品薄で手に入れられそうにないと判断したらしい。二日付けの手紙は、『だいたい毛氈を買うのは、私は好きではありません。御目付方や御巡検使は、毛氈にお座りになることはなかったように記憶しています。たとえお座りになることがあっても、小さなもので間に合います。こんな物は贅沢品で、あまり必要のないものです。無駄遣いするのは止めておきなさい。そんなことをするのは、第一に奢りです。だいたい我が家の家作も先祖以来質素な作りで、大毛氈は不似合いです。永沢が前から所持しているのは承知していますが、かの家もこのような奢りのせいか、当今あまり「目出度い」様子には見えません。』と教訓を含んだ、皮肉たっぷりの内容になっている。見栄のきらいな忠敬らしい判断だが、一方「酸っぱい葡萄」のようにも思える文面である。

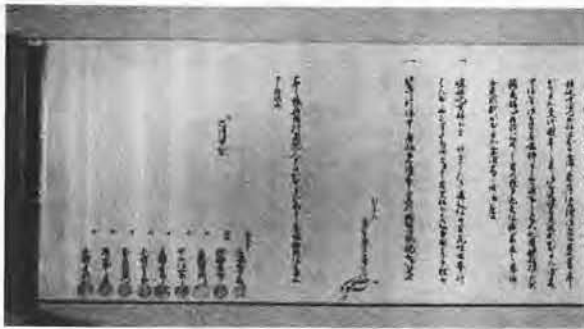
「阿蘭陀風説書」

「風説書」は、出島の商館長の部屋でその立会いのもとで通詞が翻

訳し、全員が署名捺印し、長崎奉行の検閲を受けた後に、封をした。少なくとも二通作られて一通は長崎奉行所の控えとして保管され、老中宛の正文は継飛脚で急送された。

寛永一八年（一六四一）の第一号から安政四年（一八五七）まで、所々欠番があるが、日蘭文あわせて約二〇〇〇点の写しが残されている。

「風説書」の原本は世界にただ一つだけ現存している。商館長ヘンミーが署名した寛政九年（一七九七）のもので、一九九六年、近藤重藏ゆかりの家から「江戸東京博物館」に寄贈された。常設展示品として、そのレプリカをいつでも見ることができる。



風説書 江戸東京博物館蔵

極秘なはずの幕府独占物が世の中に漏れた出口は、①オランダ通詞から、②長崎奉行所に一通だけあった「控」から、③長崎の有力な町年寄から、④殊のほか入手に熱心だった長崎警備の三藩（佐賀・福岡・大村藩）から、⑤各藩が派遣していた「長崎聞き役」から、⑥江戸で翻訳される場合の天文方訳官・蕃書調所の教授などから、の六か所あったと考えられている。

忠敬は国際情勢に強い関心を抱いていた。彼がどこでこの文を筆写したか分からないが、長崎に入ったのは文化一〇年で五年後になるから長崎ではなく、江戸の天文方経由ではなからうか。

忠敬の写しから三〇年余りたった天保十一年（一八四〇）年の「風説書」は、驚くべき情報を伝えてきた。「アヘン戦争」の詳細である。

古河藩家老鷹見泉石は、この詳報「別段風説書」を初め、多くの情報を精力的に集めた。以後歴史は、幕末開国に向かって大きく動いてゆく。彼や渡辺崋山に通じる道を忠敬も歩いていたのだろうか。

その三 「日晷扇」のこと

さがしあぐねた日時計

ある日、足立左内の嫡男足立重太郎（天文方吏員）の書簡を読んだ。文政年間に忠敬の嫡孫忠誨宛に書かれたものである。

原文 (新目録番号 〇〇三—13)

釈文

日晷扇が出来てきましたので、とりあえずさし上げま
す。もともと昨年暮れに少々出来てきましたので、さし上げたいと思
っておりましたが、方々から懇望あり、みんな出払ってしまいました。
年があけて、あと少々出来てきましたのでさし上げます。扇屋の定め
値段では、この扇六本で南簾一片のようです。

口語文

兼てお約束の日晷扇が出来てきましたので、とりあえずさし上げま
す。もともと昨年暮れに少々出来てきましたので、さし上げたいと思
っておりましたが、方々から懇望あり、みんな出払ってしまいました。
年があけて、あと少々出来てきましたのでさし上げます。扇屋の定め
値段では、この扇六本で南簾一片のようです。

漢和辞典を引くと「日晷^{ニツキ}」とは「日かげ、日かげの長さ、日時計の
こと」とあるから、日時計の一種であろうとは思ったが、具体的なイ
メージがわかない。

この書簡の年次特定のきつかけになるかもしれないと思い、「研究
会」会員の荻原氏と岡部氏に問い合わせを試みたが、ご覧になった
記憶がないようであった。

岡部氏は国立科学博物館の専門家に問い合わせたり、「セイコー時計
資料館」に出向いて調べたりして下さり、写真の資料も届いた。

和時計と一口にいうが、実にいろいろの種類があるのに驚かされる。
日本人のせつかな氣質に根ざす、時刻を正確に知りたいという強烈
な欲望と、手先の器用さが、これだけのものを生み出したのだろうか、
と見て見ているとある種のいじらしささえ感じられる。

その中の一部を見ていただきたい。

(前略)

兼て御約束之

日晷扇出来二付、不取敢差上候

元来、旧冬少々出来、差上度存

候處、諸方へ懇望有之、皆々

出払申候 春ニ相成、跡少シ出来ニ

付、差上候 扇屋方定値段、右六

本ニて南簾一片之積ニ御座候

(後略 正月一二日差出)

この中で、岡部氏も私も気になったのは、「扇」という字のついた左上の「扇鍾日時計」である。「鍾」はおもりだから、「扇鍾」とは、扇子の要に紐でつけた「鍾り」なのであろう。説明には、木製で磁石兼用の日時計とあるから、中央の黒い丸いものが、ふたつきの磁石のようである。

左下の将棋の駒のようなものが日時計で、針は折りたためるようになっていて。苦心の作だが、扇子はもともと携帯に便利のように団扇を折りたたんだもののなに、二つも品物をぶら下げていては、取り出すだけでもたいへんだし、重そうである。それに高価なもののように見える。

お金の方からも考えてみた。

南鐐とは江戸時代後半、明和年間から造られた銀貨で、表面に「以



南鐐八片 換小判一両」と刻印が押されている。金一両が何円に当るかは諸説あるところだが、米で換算して五・五万円、賃金で換算して三〇万円と開きが大きい。

磯田氏の著書「武士の家計簿」によると、加賀百万石のそろばん係猪山家は、住込みの召使二人を入れて八人家族だが、米で換算すると年収二五〇万円の低所得層になってしまうそうである。日銀のホームページも、一両は三〇万円と見積もっているそうだから、これで計算してみよう。

「南鐐一片」は一両の八分の一だから、三七、五〇〇円、これが六本分だから扇一本は、六、二五〇円となる（米換算だと、一、一四六円）。高い扇だが、科学情報を盛り込んだ、磁石のおまけつきの扇なのだから、仕方がないのかも知れないと思った。

佐原に帰ったとき、忠誨はまだ一七歳である。しかも伯母妙薫が亡くなって、血族はたった一人になってしまった。

天文方手付手伝から、同雇に格下げになったが、れつきとした幕臣であり、扶持米はもとより拝領屋敷も以前のままである。

「忠誨日記」によると、日・月食や恒星の観測をするため今の旧宅内に天文台を作り、親戚を呼び集めて見学させているし、年末には、来年の暦を天文方から送ってもらって配っている。

各種の史料から推察できることだが、彼は懸命に背伸びをしており、忠敬の偉業の重みに耐えかねているように見える。

この扇が、天文方の吏員であることを親戚に誇るための配り物として、江戸へ注文した品であることは、明らかである。右に引用した足立重太郎の書簡によれば、天文方の人々も、方々にこの扇を配っているようだが、天文方御用の扇屋の言い値が高いのか、一両、三〇万円という最近の研究の成果が高すぎるのか、よく分からない。

いずれにせよ「扇鏢日時計」は、「日晷扇」^{セシタイ}とは別物のように思われた。

「みづかりました」

そうこうする内に、朗報が転がり込んできた。

忠敬家の縁戚に当る銚子の宮内氏から、御家蔵の史料写真を載せた非売品の著書「文化の開拓者―伊能忠敬翁」が贈られてきた。その中に、まさにこれが「日晷扇」と思われるものを発見したので、その写真を掲載する。



親骨に目盛りが付いていて、扇面には横軸に季節、縦軸に時刻をとり、それぞれに相当する影の長さが列記してある。

私見だが、使い方は次のようなものであるか。たたんだ扇自身を針として使って、その影の先に印を付け、扇を倒して親骨の目盛りでその長さを測り、扇面を開いて、その季節の、その長さに相当する時刻を読み取ったのであろう。

値段についていえば、たとえ専門知識が書き込んであっても、特に器具がついているわけでもなく、これで一本六、二五〇円は高すぎると思われる向きもあるが、扇と思うから高いので、時計と思えばたいへん安い。

和時計の専門家も御存知ないようなものが、現実に銚子の宮内家に存在するのだから、大切に伝えていってもらいたいと思う。

日晷扇の具体的なイメージが定まっても、目録を作る者としては、手放して喜ぶわけにはいかない。この所蔵品の由緒、つまり何時・何処で・誰から・入手したかがはっきりしないので、この書簡の年次特定が出来ないからである。宮内家が伊能忠敬から直接もらったのであれば、そしてその年が分かれば、当該書簡の年次特定ができるのだが。

参考文献

日蘭学会・法政蘭学研究会編 『和蘭風説書集成』下巻

吉川弘文館

『日本の近世6・情報と交通』

中央公論社

片桐一男 『開かれた鎖国』

講談社

板沢武雄 『シーボルト』

吉川弘文館

磯田道史 『武士の家計簿』

新潮社

宮内秀雄・敏共著 『文化の開拓者―伊能忠敬翁』

非売品

良助の次男 榎本武揚（二）

伊藤 栄子

出牢のあと

天井が低い上に、窓も無い暗い牢屋で、武揚は一度大病を患ったことがあった。こういう所に二年も居れば、病気にならない方が不思議である。この時は一流の医師によつて、治療を受ける事ができた。これは、出獄を心待ちにしていた黒田清隆のはからいであつた。武揚が牢から出る四日前に出した手紙に、姉の観月院から麦酒（ビール）の差し入れがあつたと書いてある。彼は仲間と共に出牢を前にして乾杯したという。明治三年には横浜で初めて米国人がビールを作つて売つたというから、入手は可能であつたらう。国産のビールができるのは明治十三年である。（キリンビール資料室）

明治五年の一月六日武揚らは放免と決まつた。その二日後、黒田から早速北海道での仕事を要請される。勿論、出牢前から内々の話しはあつた。しかし、彼は一度、反逆した身であるから、政府に出仕する



黒田清隆

北海道大学北方資料室蔵

つもりはないことを伝えて断つてゐる。けれど黒田は命の恩人であり、ためらつてゐた。当時黒田は北海道開拓次官として、武揚に開拓使四等出仕、並に釧山検査を命じた。もともと、武揚は北海道の地には思いを馳せていた事もあつて、黒田の言に、やつと重い腰をもち上げたのである。そののち、武揚が親類預けの身から解放されるまでの間、同時に入牢してゐた松平、荒井、大島、永井、沢の五名は、出所後すぐに芝山内の開拓使出張所へ出頭を命ぜられ、同日、開拓使奏任出仕を仰せ付けられた。こうして、武揚は北海道の釧山局長や、中判官に拔擢され、その新知識を千島の毛皮業振興にも役立てたのである。家庭を顧みている暇はなかつた。

そのころ、政府は樺太問題について交渉のため、ロシア本国に派遣する全権公使の人選を急いでいた。西郷、板垣、江藤、副島らは征韓論に破れて下野してゐたし、その上彼らは征韓論に関連して、対ロシア強硬派であつたから、談判の決裂は必定であり、使節としては不滴格者であつた。岩倉、木戸、大久保等は多忙で国外へ出る余裕はない。また黒田は北海道開発の責任者として、その職を離れることはできない。その間、寺島宗則、伊藤博文なども人選に出てゐたけれど、これに對して、黒田は榎本武揚を強く推してゐた。もとより榎本は薩長の閥には無関係なばかりか、かつて国賊として戦つた過去がある。それを承知で黒田が榎本を推挙したのは、彼が国際的使節として十分な資格の有ることを黒田は知つてゐたからであつた。この明治の初めの頃、当時のすぐれた外交官といわれた副島や大隈の知識は、フィートンの「万国公法」の漢訳を出ないものであつた。この漢訳書は、アメリカの宣教師ウイリアム・マルチンが長いこと広東で伝導してゐた時、漢訳した本であつたといわれる。この漢訳本は明治三年に京都で刊行さ

れ、これが日本における唯一の国際法の書であった。しかし武揚はオランダに留学中、この国の学者から本格的な国際法を学び、オルトランの「海律全書」についても十分理解していたのである。ただ武揚は余り自分の知識を吹聴しなかったし、自己宣伝などを嫌っていたから、彼の持っている知識を知る人は少なかった。この点、黒田は彼の良き理解者であり、武揚もそれに応えた。この関係は生涯に渡って続き、後に黒田の長女と、武揚の長男が結婚して縁戚となっていく。

ロシアへの派遣

武揚は、辰の口の牢舎を出てわずか二年余の後、早くも日本の外交上重要視されていたロシアとの交渉のため、特命全権公使の有力な候補者となった。こうして薩摩出身の黒田の推挙によって、ついに明治六年の末、閣議によって榎本のロシア派遣が内定した。つまり、当時の政府を牛耳っていた薩長の中にも、また在野にも明治の初期、榎本の右に出る適任者はいなかったのである。出牢から二年あまりで、国の全権を担う公使に抜擢されたことも歴史上珍らしい。

明治七年一月十八日、海軍中将に任命された。これは当時異例の任命であり、そのころ海軍の階級で大佐以上のものはなく、少将も大將も無かったから、榎本が最初の中将であった。ヨーロッパの社交界では、官位の無い者は重みを欠き、将官の位は非常に威厳を持つものと考えられていた。全権公使として官位のある方が、得策であることを説得されて武揚は承諾する。そして同年三月十日全権一行は横浜を出港した。一行はインド洋を横切り、スエズ運河を通過してベニスに上陸した。更に汽車でパリに到着し、ここで大枚を出して、ロシア皇帝に謁見のための大礼服を調えた。パリからオランダへ行き、かつて留学中に知りあった人々と逢い、旧交をあたため、ベルリンに入る。過

ぐる明治三年、政府は西欧の文化を早急に吸収すべく、留学生を海外へ送り出していた。そこで当時ベルリンには、すでに十四、五人の日本人がいて、主に兵学の研究者であったという。六月七日ここを出発、同月十日、ロシアの首都サンクトペテルブルクに到着した。十八日には、ロシア皇帝アレキサンダー二世に謁見し、殊の外親切な饗応を受けたという。二十日には、皇帝と共にクロンスタット軍港に行き軍艦と台場を見学し歓待を受けた。彼は好意を以って迎えられたらしい。

こうして武揚は、明治七年（一八七四）から明治十一年（一八七八）まで足かけ五年の間、ロシア国内の政情や国情の推移を、つぶさに目撃していたのである。

榎本、千島の問題

榎本がロシアに派遣される頃の榎本には日本人、ロシア人、原住民が雑居していて、明治六年には、原住民の殺害事件があり、翌七年の初めにはロシア人の暴行があつたと絶えず、ロシア兵が発砲して漁場等を荒らすことが続いていた。そのため日本からの移民の数も減少して、七年三月ころには残っていた移民五百数十人を、北海道の地に移転させることが決定し大半は移ることとなり、榎本がロシア政府と交渉を開始する頃は、事実上日本は榎本を放棄した形になっていた。

それより前、ロシアがアラスカをアメリカに売却していたのにならって、明治五年、時の外務卿副島種臣が、榎本の北緯五十度以南の地を日本が買い取ることをロシア代理公使に申し入れたが、ロシア側は応じなかった。その間、ロシア政府は榎本へどんどん流人（るにん）を送り込み、既成の居住権を広げていったのである。こうした状況の中、明治七年一月、横浜のロシア領事館で寺島外務卿と、ウラロフスキー代理公使との会談が行われた。彼はキュリル（クールル）島（千島）の利益の

あることを述べて、樺太と交換する用意のあることを説いた。これはロシア側から樺太の代りに、千島を提供することを提案した最初のものであった。ではこれまでの樺太、千島はどの様であったか、歴史の一端を見てみよう。手元に一つの資料がある。

文化四丁卯、魯西亞人蝦夷地
島々及乱妨之時、南部
大膳太夫利敬、居城奥州岩手郡、津輕
越中守寧親、居城奥州津輕郡弘前、等
初諸侯より追々相屈する、趣
公辺仔出サレノ趣、
聞及、任左集録之

文化四丁卯、魯西亞人蝦夷地
島々及乱妨二之時、南部
大膳太夫利敬、居城奥州岩手郡、津輕
森国、高拾万石
越中守寧親、居城奥州津輕郡弘前、等

高（記載なし）

初諸侯より相屈ラル、趣
並、公辺仔出サレノ趣等ヲ
聞及二任、左二集録之

* 仔は誤字（仰せカ）
* 任（まかせ）

大意

文化四丁卯年：（一八〇七）ロシア人が蝦夷地の島々で乱暴に及んだ。その時、南部大膳太夫、津輕越中守等の諸侯より段々報告が届けられた。またそれについて公儀から仰せ出された趣意など、聞き及んだことを、左に集めて之を記した。

これは、ロシア人が択捉島へ上陸し、乱暴を働いた事を記録した文の序文である。本文はかなり長文で、「文化択捉の露寇」と題されている。幕政時代、外国との関わりなど喧伝することは禁止されていたから、密かに写して伝えられたものであろう。

またこれとは別に、箱館奉行所支配勤務の田中伴四郎景貞という者が、択捉の敗戦を江戸の知人に送った手紙の大意があり、この方が面白いので、その頃の様子と共に内容を記した。

文化元年九月、長崎に入港した露人レザノフは日本の鎖国令が堅く、とても通商の見込みの無いことを知り、憤懣やる方なく帰国した。その後日本の鎖国を暴力で打破すべく、文化三年九月度十一日、樺太の西浦オフイドマリ（大泊）に上陸し、暴力と略奪をほしきままにした。当時松前藩の樺太漁場は、ただ春、夏の時節に勤番するのみで、秋は引揚げる状態であり、外国の事情も知らぬまま、勿論無防備であった。

こうした情況のもとに、ロシア人が突然樺太の前記に上陸して、米六百俵、酒、雑貨を略奪して会所、倉庫を焼き、弁天社の御神体を奪って出帆した。樺太の変報は漸く文化四年四月六日箱館奉行に届いた。驚いた奉行は、直ちに津輕越中守の兵八十名を向わせたが、その直前に、今度は千島列島の択捉島を彼らほうがつていた。

四月二十三日、捉提の西浦苗穂（内保）の海岸に、二艘の船が碇を下ろし、いきなり巨砲を発して陸上を威嚇した。あわてた番人はシヤナ（紗那）の会所へ急報した。四月二十五日には、番人五人を露人が捕らえ、米、塩、器具、衣服を奪って倉庫を焼き引揚げた。二十八日には、会所の幹部が集まり相談する。しかし、突然に砲撃を受けて不意をつかれた会所の役人共は、すでに浮き足立っていた。番兵の副将、戸田又太夫、南部家火薬師大村治五兵衛、医師伊達見達など。そこへ丁度視察に来ていた間宮林蔵も加わった。物を奪い、暴行をしたロシア人は必ず来襲するであろうから、防戦を計らねばならない。しかし、我が軍は硝薬不足、弾丸や銃の数も少ない。全部ここで失っては後日に差支える。また陸兵だけでは不足なので、大工や他の職人までも動員し、銃を持たせて控えさせた。大村治五兵衛は弾丸を鋳て備えた。また見達は、竹槍を作って夷人に持たせた。夜明けの会所は南部、津軽の幔幕を廻らし、後ろの山に陣屋を設けたというから、これではどう見ても中世の戦いである。然しこの「いざという時は竹槍で」という考えも、第二次大戦が終わるまで、国民の間には確かに存在していたのだから、これを中世の戦法だと笑うわけにはいかない。

正午ころ、海霧の晴れ間から、三艘の船が湾内に入ってきた。これを見て戸田又太夫は、戦う前に相手は交易を求めているのかもしれないから、当方も発砲を控え、通詞を出して談話をさせてどうかという事で、通詞の陽助を呼ぶ。陽助は竹竿の先に白布（白旗に見たてた）をつけて、会所のある山を降って海岸へ向った。この様子を見たロシア人は、端艇はしけの上から一斉に発砲して、陽助は即死してしまった。これではとてもルールの分かる相手ではない。ついでロシア人が上陸し、海岸の魚粕倉にたてこもって、砲撃を開始した。シヤナの町は硝煙に包まれていく。この時、我が軍の大村は巨砲一発を粕倉に向って打ち

下ろした。弾丸は命中し、小屋は吹きとび火を発した。これに恐れたロシア人は端艇をさして退いた。夜は次第に更けていった。海上のロシア艦からは、盛んに砲が打ち込まれる。我が方の陸上の守備兵は大混乱となり、続々と逃亡をはじめたのである。その上、守兵の将、戸田又太夫、関谷茂八郎は全く戦意なく一同を集めていった。「某は、公金及び公用書類を失っては申し訳けが立たぬから、これを持ってこの地を一時退去する。再挙は有萌ありもえであるから、各々方はここに居残って監視せられよ」と、最早や及び腰である。医師の見達は「戸田殿それは余りに卑怯な振る舞い、敵も我が砲の威力に恐れて本船に帰り、中々上陸はするまい。上陸したら皆で一戦し、破れた時は自刃すればよいではないか」と声高に言えば、間宮林蔵も「我が国は蒙古襲来より、敵国に侮りを受けたことはない。今逃亡すれば末代までの物笑い、見達殿と同様の意見でござる。逃亡など思いもよらぬ」と忠告した。しかし、忽ちにして、南部、津軽の兵達はシヤナの守りを捨てて行く。林蔵は最後の守備のため、大村治五兵衛を探したがみつからない。火砲の係りがいなければ、守れないので一同有萌に後退した。夜も明けていった。時に戸田又太夫の姿が見えない。漸く見つけた又太夫は、自ら喉をかき切って果てていた。彼の持っていた公文書は関谷茂八郎が預った。また大村治五兵衛は怪我をして倒れていた。シヤナの町は砲火で焼かれてしまった。番人たちは、その後町を見廻りに出た時、一人のロシア人が番屋の中で、酒を飲んで酔払っていた。それを取り囲んで竹槍で殺して氣勢を取り戻した。また波止場の辺りをうろついていたロシア人も立ち所にさし殺した。ところでその露人のポケットの中から、松前に出す書付が一通出てきて、これが我が国との交易を求める書であった。勿論公文書ではないが、この書はカムチャツカで、ロシア人が源次という者に書かせたもので、原文は全部ひらがなで書

いてあつたという。交易を望む立場としては、手荒な行動のやり過ぎである。

択捉島で乱暴を働いた露船二艘は、五月三日はウルップ島へ向かった。更に五月二十日樺太へ行き、昨秋露人が焼き払った場所を巡視した後、ルータカ（留多加）の番屋に放火した。松前の家臣、松前左膳は士卒百二十人を統率していたが、この変を聞いて一戦も交えず、白主に至る四十里の道を馳せて、漁船に乗って宗谷へ逃げた。その後、五月二十五日露船二艘が利尻島をも襲った。利尻では、たまたま当月五日、森左仲という者が宗谷に送る大砲を、順風待ちのため、利尻の港に船を停めていた。そこへ入港した二艘の露船が、大砲を天に轟かして脅迫したので、舟子達は皆逃げ出し、森左仲も宗谷に逃れた。この日露船は停船中の日本の船四艘を焼き払い、その貨物を奪い、船人を捕虜にして引揚げた。宗谷番所には、松前より出張の深山宇平太と小川常存の二名が駐在していたが、宗谷へ逃げてきた者から事情を聞き、大いに憤って津軽兵や夷兵を出して、海辺の防備を厳重にした。といつても大砲や銃等の武器が多数あつたわけではない。お寒い限りの防備であつた。

利尻島を露船が掠奪した時、樺太や択捉で捕えられた番人八人を彼らは返してきた。それに再び松前奉行所に提出する交易を望む書を、捕虜に託したという。

この択捉島その他の敗戦は、関係者だけが知るのみであり、この事件も、内密の手紙を通して伝えられたもので、国民に知られることの無かつた歴史の一頁であつた。その後、ロシアとの情勢は、平静をとり戻していたが、間もなく日本の近海には、黒船が現れるようになり、北の守りの砦として、漸く幕府が五稜郭を建造したのは、慶応元年（一八六五）の幕府終焉の三年前であつた。

ロシアとの条約

榎本公使の目的は、樺太の帰属をロシア当局と交渉して決めることであつたが、その出発に当って日本側としては、樺太と千島との交換を呑む考えを榎本に伝えていた。こうした国の訓令を榎本は胸にたたんで、交渉に當つたのである。

これより少し前の明治三年、政府は対樺太政策の方針を決めるため、黒田清隆を開拓次官として、主に樺太地方の任務に当たさせた。そこで彼は八月に樺太へ赴任し、その実情を視察して、我が国の樺太維持は向う三年しか保ち得ないと判断し、北海道、樺太政策を建議することになった。黒田としては、遠くの樺太に費用や人力を入れて守るより、日本の国力の充実してない時、北海道の開発に集中する方が得策であると考えたのである。こうしたことが下地にあつて、樺太放棄の論となつたのであつた。もし、その頃日本が樺太を領有しようとすれば、兵を送つて戦うしか道が無かつたのである。これらの事情から、日本としては樺太と千島の交換は全くの損とは考えていなかった。いづばうロシア側から見れば、元来樺太の領土権については確証もなく、日本人の雑居を認めてきた。日本が南半分を放棄することは、ロシアにとつて儲け物であるに相違なかつた。

第一回会談は明治七年六月二十二日、露国外務省アジア局長スツレモーフとの間で行われたが、これは初顔合わせで、順次会談を進めたのである。榎本の交渉は彼の語学力により相対で行われ、駆け引きもうまく中々面白い展開であつたが、ここでは割愛する。ロシア政府はあくまでも、樺太の領有を主張し、これを皇帝の意向であると伝えてきた。榎本はここで相当の代償があれば、樺太を手放してもよいことを初めて述べ、その代地として千島諸島の譲渡を要求した。スツレモーフはこの要求に難色を示したが、日本が樺太を手放すことで、

ロシアの要求が通り会談の見通しがついた。実はロシアとしては、当時バルカン情勢が逼迫し、中央アジアでも英露の利害の衝突があり、ロシア側はこの談判の解決を急いでいたのである。翌年三月二十二日、ロシア政府は次の回答を榎本にもたらしした。

- 一、日本が樺太全島をロシアに譲渡する代わりに、千島諸島を所有すること。
- 一、クシユンコタン（九春古丹）に至る日本の船舶は、十年間港税と海關税を免除すること。
- 一、樺太にあった日本人の建物百九十四戸の代償として、七万四千六十三円、動産の代償として、一万九千八百十四円を交付する。
- 一、オホーツク海及びカムチャツカにおいて、日本人の漁業権を認めること。

注（物価の目安として、明治三年米一俵の値段は一元八十七銭）

以上の回答を受けると、直ちに本国に伝えて訓令を待ったが、もともと日本の要求している事でもあったので、反対もなく寺島外務卿から承諾の電報が届いた。こうして日露間の懸案であった樺太問題は一応のケリがついたのである。

しかし、この解決は日本の社会では歓迎されず、榎本は新聞でさんざんに叩かれた。国民は樺太放棄を外交の失敗であると責め、その上ロシアの横暴を怒り、ロシアに対して警戒心を強める結果となった。榎本は、留守宅から日本における榎本の不評を新聞記事と共に伝えてくると、そのつど一々気にかけないよう返事を出し、かえって外務省からは、賞められたと家人を慰めている。

武揚は手紙をこと細かに書く人で、読むと、いろいろな発見がある。

外交官として彼はたびたび宮廷の舞踏会に招かれた。八年二月十四日付の妻宛の書簡に、去る五日の夜、宮中にて各国公使、政府の高官五、六百人、親王方の奥方、高官の令嬢等、みな立派なる衣装にて打交わり、男女組になりて踊りこれ有り、手前はまるで踊りなど知らぬ故、我々も大礼服でにこやかなる顔付にて居たり。踊の間は臘燭五千本程、

つり燈籠（シャンデリア）にて輝き美石の柱は数を知らず、その元に天津乙女の如き美女百人余（しかし、よく見ればチョンポリ鼻のおたくも居て：武揚も口が悪い）とロシアの宮殿の内部の様子を書いてゐる。更に夜十二時半別の間にて大御馳走あり、この部屋は印度の青々とした木を植え並べ、山海の珍味は純銀の皿に盛られ、諸銘酒をテーブルに置き、銘々随意に飲み食いする間、楽人は樂を奏し、室内の緑を誘いたる風は、日本にては四月の藤の花の咲く頃なるべし。外は白雪霏々として窓際に舞う。（斯る暖かなる風は、火にて暖めたる空気を通わせるによれり）：今から百三十年近くも前に、集中暖房の設備が整っていたこと分かる。さすがの榎本も当時のヨーロッパ、ことに豪華なロマノフ王朝の舞踏会や晩餐会には驚いたらしい。

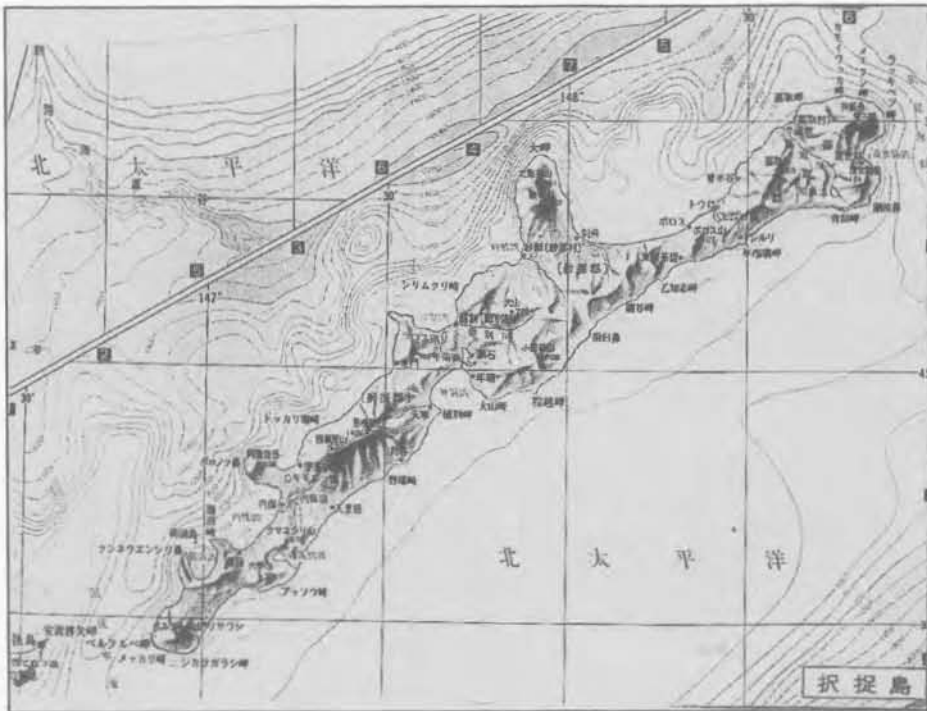
また十年六月三十日の妻宛の手紙には、ペテルブルクから六、七里離れたクロンスタットの露国の軍港見学のことを伝えている。当時、トルコと戦っていたロシアが、トルコの甲鉄艦を破壊するための水雷その他の見学が目的であった。その日はロシアの海軍郷が、わざわざ榎本のために蒸気船を出してくれ、日本の海軍士官も見学を許された。この水雷は軍事上かなり秘密にしておくべきものであり、ロシア政府にとつては破格の事であった。

我が国では日本刀の戦いを放れて間もない時、ロシアでは水雷で鉄の軍艦を破壊するという、高度な武器の開発が進められていたのである。このことは日本にとつて、その後の軍備の一つの指針となった。

明治初期、日本からの手紙はロシアの首都迄二カ月を要し、電報は長崎經由で四、五日かかり、しかも英文電信のみであった。この不便なロシアとの間を、愛妻家の武揚は夫人宛てに、滞在中百通余の手紙を出し、また公的立場の全権公使として、ロシアの国内、国外の情勢を絶えず日本の外務省に報告している。しかし当時の日本にとって、広大なロシアの事情をもっと調査する必要を痛感して、公使の任務終了の帰途、まだ鉄道も無かったシベリアを横断し、その詳細を「シベリア日記」にまとめ上げた。これは日本人としてシベリア事情を報告した最初の人であった。

(以下次号)

(いとう えいこ・古文書研究家)



本文で苗穂とあるのは択捉の内保であろう。ナエホとナイホ、これはエトイ訛りのある人の言葉を聞き書きにし、地名を当て字で書くところになったのではなからうか。

伊能忠敬と久保木清淵との契(二)

佐久間 達夫

五、久保木清淵の子・清常の伊能家への協力

久保木清淵の長男・清常は、天明六年に生まれ、幼名を俊蔵、号を梅山といった。忠敬・忠誨の地図作製に協力する。

また、忠誨が祖父忠敬の功績によって、幕府から苗字帯刀を許され、江戸の箔屋町に土地を拝領するため、江戸に登ったとき、「送伊能君之東都序」という序を書き、忠誨を励ましている。

久保木清淵自筆「久保木氏家譜」から久保木清淵・清常部分のみ抜粋してみよう。

○ 久保木氏家譜

遠祖・藤原清美……………清英

幼名長太郎 後改太七郎

寛政五年八月二十一日六五歳没

妻 伊予 香取幸左衛門の娘

後妻 瑩津 香取太右衛門の娘

清恒(母伊予) 早世

さ紀(母瑩津) 早世

清淵

幼名新四郎 通称太郎右衛門

字 臨川 蟠竜 仲黙 号 竹窓

竹陰 堂名息耕

清常……………良

幼名俊蔵

号 梅山

字 克明

戒名忠恕院至徳清淵居士

文政十二年八月二十八日 六八歳没

妻理与 常陸国鹿島郡木滝村 木滝

与右衛門の娘

天保十三年十二月八日没

清綏 分家して太郎八と称す

六、伊能忠誨に学問を教えた久保木清淵

『忠敬書簡』(二巻九)の文化十年閏十一月二日付の書状(出雲国安道町から長女と長男の嫁宛)に、

三治郎(忠誨) 儀、久保木蟠龍へ手習素読に遣し候所、読書之方存の外、覚候に付、素読の方宜候旨、久保木氏被_レ申候よし、何様当方は読書も可_レ宣候。

兩孫(忠誨・鉄之助)共に御油断無_レ之御仕立可_レ給候 来春帰府候はば、我等方法差置仕立候様と存候。

と、記してある。

また、「伊能忠誨日記」の文政八年七月一日の条に、

予、津宮加納屋(大川治兵衛)へ行き中食し、昼後、先生

(久保木清淵)へ行く。論語、並びに世説講釈を聞き、又、

加納屋へ帰り、直ちに帰宅

と、記してあるように、忠敬は、長男・景敬なき後、孫・忠誨の教育を久保木清淵に託し、忠誨も清淵について論語などの学問に励んだが、二十二歳の君さで死去する。

七、久保木清淵や父出生宅で学んだ学問を生涯持ち続けた伊能忠敬

伊能忠敬は、三十四歳のときの安永七年(一七七八)五月二十八日

から六月二十一日まで、妻「達」と一緒に松島方面に旅をした。その際、旅先で見聞した和歌五首が書き留めてあり、続いて寛政五年（一七九三）に、久保木清淵などと共に関西旅行をしたときには、二十一首もの和歌を旅行記に記している。

また、十七年間にわたる全国測量の旅先で見聞した和歌や俳句を「測量日記」に書き留めているとともに、忠敬自身も旅先で狂歌を詠んでいる。

○ 忠敬が測量先で詠んだ狂歌

・ 文化五年 伊予国佐田岬にて

白髪の 三千丈も 何ならじ

伊予のおはなは 十八里あり

・ 文化七年 豊前国小倉にて

測量の 年も六十六箇国

中国超えて 西国の春

・ 文化十年 肥前国相神浦にて

古来にも 稀なる春を 松浦潟

八十嶋かけて 九州を經ん

など

忠敬が、和歌や俳句に関心があったのは、忠敬の父の出生家の小堤村（現横芝町小堤）の神保家や、その一族で俳譜を嗜んでいた人がいたことや、久保木清淵に儒学を学んだことに起因していると思う。

「測量日記」には、三十三測量地で七十九首の和歌や俳句を認めている。筆者は、その中の十首について、該当する市町村に問い合わせてみた。

資料八 「伊能忠敬測量日記」に記されている和歌や俳句

（筆者編著『伊能忠敬測量日記』より）

*注 現市町村名は平成八年の調査時のもの

○ 第六次四国大和路測量

・ 文化五年五月二十六日 伊田浦（現高知県大方町）

松山寺の額を写す

世に遠く 阿類かな支可の 影とめて

つき越加たみの 水具きの阿と

（世に遠く あるかなきかの 影とめて

月をかたみの 水くきのあと）

日野前大納言資枝卿

都に天 屋満の者に見し 月なれど

浪より出て 浪にこそ楚いれ

（都にて 山の端に見し 月なれど

浪より出でて 浪にこそいれ）

紀貫之朝臣

高知県幡多郡大方町

・ 忠敬の止宿に訪問した田野浦の彦之進、入野郷の永野浅六、上川口浦の安光慶八は、年譜書などに弁蔵、永野左近馬、安光敬八と書かれているので、俗名が別にあつたのであろう。

○ 第七次九州一回目測量

・ 文化六年十月一四日 井尻村（現岐阜県御嵩町）
鬼門坊の和泉式部廟所を写す

ひとりさえ 渡れば沈む うき橋南

阿となる人は 志ばしとどまれ

(一人さえ 渡れば沈む 浮き橋に

後なる人は しばしとどまれ)

法名 専意法尼

岐阜県可児郡御嵩町

・中山道は江戸時代に整備された五街道の一つ。古代から街道であった東山道が元になっている。東山道を旅してきた平安時代の女流歌人、「和泉式部」が御嵩路で病に倒れたといわれている。

・文化八年五月二日 下初狩駅(現山梨県大月市)

初雁をよんだ歌

今盤とて 霞を分け天 帰るさ爾

お保つ可なしや 初雁の里

(今はとて 霞を分けて 帰るさに

おぼつかなしや 初雁の里)

聖護院大僧正道興

山梨県大月市

・聖護院道興は、永享二年に関白近衛房嗣の子として生まれ、後に本山派修驗宗(山伏)の総本山である聖護院の大僧上となった人である。

道興は、諸国を行脚し、各地の名所や霊場を訪ね、その様子を「廻国雜記」に記している。道興歌碑は、甲斐国志の編さんにあつた森島基進が建立したものである。

・文化十年十一月二十日 湯川村(現広島県高野町)

薛山をよんだ歌

薛山 お路須嵐の 者げし起爾

柴のとびらも 阿かぬこ路可那

(薛山 おろす嵐の はげしきに

柴のとびらも あかぬころかな)

広島県比婆郡高野町

・高野町新市にある曹洞宗功德寺は、承久三年に後鳥羽上皇が隠岐島へ御遷幸の途次、九月から翌春三月まで御在所されたといわれている。

忠敬が記した歌とよく似た歌として、「薛山 おろすあらしのはげしくて もみじのにしき きぬ人もなし」という歌がある。

・文化十年十一月二四日 大田北町(現島根県大田市)

雪見塚をよんだ歌

志ら天見盤 富士とや言ん 石見なる

三瓶ヶ岳の 婦連る志ら雪

(しらで見ば 富士とや言わん 石見なる

三瓶ヶ岳の 降れる白雪)

西行

島根県大田市

・西行堂は、大田市雪見町にあり、歌人西行がここに来て、はるか雪の三瓶ヶ岳を見て詠んだ歌で、後世その記念のために建立した堂宇である。西行法師、弘法大師、延明地藏がまつられて

いる。

・文化十一年二月一八日 鶏冠井村（現京都府向日市）
向日山をよんだ歌

早苗とる ふしみの里爾 雨過ぎ天

むかいの山爾 雲ぞかか連る

（早苗とる 伏見の里に 雨過ぎて

むかいの山に 雲ぞかかれる）

土御門院御製

朝附日 向日の山爾 月立天見由

遠妻を もたらん人や 見つつ忍はん

（朝附日 向日の山に 月立て見ゆ

遠妻を もたらん人や 見つつ忍はん）

柿本人麻呂

京都府向日市

・長岡宮跡は、現在の向日市（むこう市）にあり、桓武天皇の平安京遷都以前の都のあった町である。向日市は、京の都より山陽道、山陰道の出入口に位置していたので、向日山などは多くの歌人に歌の題材となっている。

向日神社は西国街道を見おろすように建っていて、奈良朝の初め、養老二年の創建といわれている。本殿は重要文化財に指定されている。忠敬隊が、文化十一年二月一八日に宿泊した向日町の富永屋甚左衛門宅は、現在も残っていて、庭などは近世の趣を伝えている。

・文化十一年四月二九日 本八幡村（現長野県更埴市）
芭蕉塚をよんだ歌

おもかげや 姨ひとりなく 月の友

芭蕉

・文化十一年四月二九日 本八幡村（現長野県更埴市）
姨捨山長楽寺にて写した古歌

月影盤 阿か須見るとも 更級の

山能麓爾 なが居春な君

（月影は あかす見るとも 更級の

山の麓に 長居すな君）

紀貫之

長野県更埴市

・更埴市の姨捨・長楽寺付近は、古来月の名所として有名であり、歌の題材として多くの歌人に詠まれている。しかし、江戸後期からは俳句が中心となった。

姨捨山は、古今和歌集で名乗りを挙げ、次いで大和物語で伝説の体系をなし現われたものである。姨捨山放光院長楽寺の開基建立は詳らかでないが、古くから月の名所として知られている。

芭蕉塚は、正確には、「芭蕉翁面影塚」といい、日本三塚（陸前松島の碑、常陸鹿島根本寺の碑、信州姨捨山の碑）の一つといわれている。松尾芭蕉は、門人越人を伴い、木曾路から一本松峠を越えて姨捨山に來遊したといわれている。

○ 第二次本州東海岸測量

・ 享和元年八月二日 会瀬村（現茨城県日立市）
止宿の床ノ間の掛物写す

七夕の 会瀬の浦に 寄るなみの

寄るとはすれど 立ち帰りつく

中務敦実親王

茨城県日立市

・ 日立市会瀬の浜には、昔から「七夕磯」と呼ばれている二つの岩がある。この岩にまつわる民話が土地の古老から語りつがれている、

昔、七月のある夜のこと、会瀬の浜一帯が昼間のように明るくなり、沖合いの夫婦岩の上に美しい男女が手を取りあっている姿が見られた。それを見た村人は、「今夜は七夕なので、天の川の兩岸から牽牛星と織女星が降りてきて、ここで会う瀬を楽しんでいるのだらう」と話し合ったということである。

それから何百年か後に、村人の一人がその岩の跡から「七本の角を持つ牛の化石」を見つけたので、村人は男女の降りた岩のあたりを、「七夕磯」というようになったと伝えられている。

○ 第八次九州二回目測量

・ 文化九年八月一七日 鹿家村（現福岡県二丈町）
鼓石をよんだ歌

名爾し逢う 響の灘の 白波は

鼓の石爾 おと津るるなり

（名にし逢う 響の灘の 白波は

鼓の石に おとつるるなり）

古歌

・ 文化十年十二月一七日 湯郷村（現岡山県美作町）

塩垂山をよんだ歌

美作や 塩垂山爾 来て見連ば

加し鳥曾鳴き 夕方空

（美作や 塩垂山に 来て見れば

榎鳥ぞ鳴き 夕方空）

古歌

資料九 神保利右衛門家（忠敬の父・貞恒の家）の俳諧集

『矢さしが浦の俳諧』加藤定彦著）より

花姫は 富貴の花の つぼみかな

七代宗載 （俳号 梅石）

しほむ時 西へ向きたる 木槿かな

忠敬の父貞垣 （俳号 都船）

散られては 短き菊の 日数哉

八代幸宗 （俳号 夜松）

別れても また見ん菊の その日かな

九代信敬 （俳号 吟松）

露や涙 かづきも重し 墓まいり

七代宗載の娘 （俳号 花秋）

墓の前 打ちあわす袖も露しぐれ

七代宗載の男

(俳号 梅星)

孫の手も とどかぬ秋の わかれかな

花秋の夫

(俳号 老石)

肩衣も しほるる露や 野辺おくり

老石の男

(俳号 臥星)

里謡に「下総(現千葉県と茨城県の一部)に過ぎたるものが二つあり、鯉の魚彦(楫取なひこ・歌人、国学者)に久保木蟠龍(清淵の字)」と歌われているように、儒者としての久保木清淵は、多くの人々に知られているが、清淵が、伊能忠敬の儒学の先生であり、日本地図作製に功烈があったことはあまり知られていない。

これは、小宮山昌秀(楓軒)も「久保木清淵の墓碑銘」で述べているように、清淵は謹愿な人であったので、自分の功を他人に語らなかつたことに起因しているであろう。

筆者も、伊能忠敬の「江戸日記」と、忠敬の孫・忠誨の「日記」を解読しているとき、「津宮、久保木太郎右衛門来たる、帰る」「久保木蟠龍来たる」「津宮の先生来たる」、それに「久保木俊蔵来たる、帰る」という記述に何十回という程、目に留まり、久保木清淵の人間性を再認識した。

昔から「偉大な人物の陰には、強力な協力者がいた」といわれているが、伊能忠敬の「日本地図」作製の陰には、大勢の協力者がいたこと、特に久保木清淵の功労が大であったことを痛感した。

(元)

編集余話

□新しい地域史料の発掘から 情報に御礼

昨年、新潟の垣見さんから「越後岩船文書」発見の便りです。その後筆者の風間先生ご家族の了解がとれて今号から連載します。「忠誨星図」同様に星座の話が出てまいります。ご期待下さい。

東京の植田さんからは「東紀州文書」発刊のお知らせ。さっそく三重県史編集グループへお願いして今号で解説部分の紹介が出来ました。

旭川の安川さんからは「香川文書」です。香川県土地家屋調査士会会報に掲載された「海岸測量日記」が掲載されていますよとコピーを送っていただきました。これは「香川県立文書館紀要」第九号で翻刻されたもの。早速文書館にお願いして抜刷を送っていただきました。この史料は揚家から寄託されたもので、高松藩領内における忠敬測量の記録。転載は今後の課題です。また旭川では九月に伊能大図展が予定されています。主催者側のおひとりが安川さんです。当地はあの有名な旭山動物園や三浦綾子記念館があります。是非お出かけ下さい。

それぞれに解説、解説がしっかりしており、測量、地図、旅の模様に加えて当時の社会状況、伊能測量評価まで広い視野に感じします。話題豊かに各種情報をお待ちしております。

□地方史情報に会報の紹介を 室蘭の井口さんからです。

東京の一人出版社「岩田書院」では地方史情報を発行しています。飯澤文夫編「地方史研究雑誌目次速報」です。わが会報も掲載したら！事務局体制の拡充など構造改革が必要ですので、もう少し時間を下さい。別のご要望の「メール掲示板」も宿題になっています。

□「忠敬文書目録」の報道発表で特報！急遽、話題を増頁にしました。当日の模様など詳細は次号で。発行遅延の事情です。(福田弘行)

(さくま たつお・伊能忠敬研究家)

忠敬談話室だより

春は水戸へいらっしやい 川上清

今年は水戸も寒い春を迎えています。一年前十二月下旬には花をつけた早咲きの八重寒紅（紅梅）や冬至梅（白梅）には、二月初旬現在ようやく一二輪花が見つけられるようになったほどの開花状況です。二月中は古木や咲こうとする前の梅枝を捜し、「探梅」と称して一輪を探し見つける楽しみになります。今後の気温推移によりますが、ここ何年か続いた暖冬から昔型に戻ってゆっくり楽しもうというのが今年の水戸の梅の特徴になりそうです。華やかさをお望みなら三月になってからでしょう。



水戸の梅まつりは二月二十日から三月末まで、中に日曜日に行う観梅デーが五回あり、楽しみ方に知恵が絞られます。例えば水戸の郷土料理の味市、夜の偕楽園の日に好文亭のライトアップ、偕楽園・水戸芸術館・弘道館を結んだボンネットバス運行等。

梅木は偕楽園に百種三千本、弘道館に六十種八百本が歴史を重ねた他に、さらに近年充実してきた偕楽園下の田鶴鳴（たづなき）梅林、猩々（しょうじょう）梅林、窈窕（ようちょう）梅林に計八百本が紅白に咲き競います。早咲きから遅咲きまでそれぞれに役割分担するので、水戸の梅は寿命が長いのです。花の形や香り、色などから特に優れた六品種が選ばれ昭和九年には「水戸の六名木」と名付けられて、この種木を採すファンも増えています。百種中何れも六種ではという向きには紅の濃淡、一重八重の違い、香り濃さなどにも興味が持てるでしょう。枝にかかる名札も参考にして下さい。

水戸藩第九代藩主徳川斉昭公（烈公）により百六十三年前に造られた偕楽園は、日本三名園の一つに称せられますが、他の二園と異なることが二つあります。入園料無料と芝生に自由に入れることです。年々に園内の案内板やトイレの整備が進み、二年前に新造された梅桜橋が入園や回遊コースに便利さを加え

ました。

昨年からは水戸のおもてなしとして県立歴史館、県立近代美術館、徳川博物館が期間中の休館日を取り止め、入館の自由がなくなりました。園内の人気は梅大使、水戸黄門一座、歴史ボランティアに集まります。前二者は記念撮影のお供に後者は園内案内です。

歴史の町の特徴として市内の交通が複雑な面がありますが、駐車場は一回五百円で整っています。電車利用ですと常磐線、水戸線の下りは期間中偕楽園臨時駅に停まるので利用もお勧めです。歩いて水戸をという方にはいばきヘルスロードや大きさが世界二位を誇る都市公園を持つコースに挑戦して下さい。春は魅力満載の水戸へいらっしやい。

（茨城県ウオーキング協会副会長）



つれづれなるままに 山本 公之

腕時計に伊能図が見えて 毎日鼓動

伊能図がもたなくなっていやしいかと、談話室前号で照会しましたが、通称からくり儀右衛門の田中久重製作の「万年自鳴鐘（万年時計）」は、上部半球にガラスが嵌め込まれ日本列島が立体化され、太陽と月が回る仕掛けになっている。大胆の反対の私の小胆から駒で、瓢箪から駒が出たら面白いんだがと期待していた折も折、盤面に日本列島が描かれたルーペ付き腕時計を手に入れた。万年時計を真似たのではないかと思いますが、去年暮れの事です。平凡社発行の豪華書籍『日本大地図』発売記念特別プレゼントの一つです。勿論、日本の地図は伊能図に極々近いのですから嬉しい嬉しい誤算でした。

* * *

研究されるものさし 忠敬さんどんな気持ち

「近代日本の計量関係実物資料の

成立過程の研究」

伊能忠敬基準尺の再実測

大綱 功・高田誠二・仙田 修・小宮勤一

日本計量史学会計量史研究（二六一）

（平成16・6）

日本歴史学会編集 日本歴史

2005年11月号 雑誌論文目録所収

計量史学会さんとは、ご縁がありまして、『伊

能忠敬研究』総目録1997年冬季号10号

「報告第一回歩測実験について」にあるように当時日本計量史学会常任理事岩田重男様が、ご活躍中の合間を縫ってのご協力をお願いした経緯あります。

* * *

同じく 日本歴史 2005年10月号

2006年3月18日～5月7日

古河歴史博物館

企画展「伊能図と鷹見泉石」

茨城県古河市 0280・22・5211

上野から宇都宮線60分

池袋から湘南新宿ライン58分

JR宇都宮線古河駅徒歩15分

東武日光線新古河駅徒歩20分

鷹見泉石は、古河藩家老として政務に尽力、蘭書の蒐集など、シーボルト、渡辺華山と交わり、その後援者として著名。是非共ご高覧いただき忠敬研究の裾野を広げたいものです。

□3月25日（土）26日（日）古河総合公園

古河まくらがの里 花桃ウォーク

二千本の花桃が見ごろ。渡良瀬遊水地の自然に桃と博物館コース。川上さんお待ちしています。歴博には小図写本、近くに「鷹見泉石記念館」「古河文学館」。

* * *

冒険家植村直巳と忠敬さん 肩を組んで

「学生時代、50ccスクーターで日本列島一周一万二千kmの旅に出た。時速30kmのスクーターは訪れる町々の生活に溶け込み、素朴な漁村や農村の空気に触れられた」もつとスロリーな旅で小さな感動に憧れ、徒歩での日本列島一周の旅が始まった。時速5kmの悠々たる旅。北海道は雪と氷の世界に憧れ、2月を選んで旅した。猛吹雪の中、原野の道を歩いていると、北極点を目指している冒険家のようで、気分は冒険家・植村直巳である。

「淡々と歩いていると、江戸時代に高齢でありながら測量の旅を続け、後に実測日本地図を仕上げた伊能忠敬を思うことがある」

地球にやさしい作文・活動報告コンテスト

経済産業大臣賞 村山 孝一

「日本列島エコの徒歩旅一二〇〇km」

読売新聞05年11月24日

* * *

現代人が伊能忠敬をインプットし、前向きな姿勢を忘れていない良い証である。





日々の話題 編集部

□受贈書目 事務所の記念書棚へ
会員のお二人から労作を頂戴しました。

◆「文化の開拓者伊能忠敬翁」

宮内秀雄 宮内 敏共著

銚子にお住まいで伊能家の縁戚にあたる宮内家。祖父秀雄氏の遺稿が見つかる。孫で教員の敏さんが中学生に語る忠敬の本を創った。三治郎時代、三郎右衛門時代、勘解由時代、翁亡き後、資料編まで丁寧な暖かいまなざしが続く。宮内家に残った新史料がいくつも公開されている。「祖父と孫の忠敬伝」として〈忠敬学〉研究の貴重な一冊である。詳細はいずれ会報誌上で発表を期待しましょう。

05年 私家版 405頁

◆「大田区史探訪」植田浩一著



筆者の植田さんは暮れの地図センター「地図バザール」にも顔を見せ、新しい疑問への探求を熱心に続けておられた。史料渉猟の文献史学も大事だが、歩き回る実証史学によって得る喜びが大きいと語られる。多摩川水源探査、品川から六郷までの伊能図など「大田区郷土の会」での記録。「探訪」にふさわしい多彩な話題。記者魂をほうふつさせる貴重な論考がすばらしい。

05年 私家版 303頁

□受贈資料

・高橋景保が描いた星図とその系統

中村 士 荻原哲夫

国立天文台報第8巻第3・4号 別刷

本号「忠敬星図」本文参照

・《史料紹介》揚家「海岸測量日記」

山本秀夫 小山泰弘 正木英生

岡田啓子 斉藤桂代

香川県立文書館紀要第9号 抜刷

□今年のウォーク情報

5月31日〜6月9日

第六回伊能番外・能登半島一周 270+

七尾―小牧―甲―羽根―恋路―狼煙―

真浦―輪島―千代―富来―羽咋

6月4日

全日本歩測大会 in つくば 2006

6月8日〜11日 佐原〜深川

第五回伊能忠敬江戸入りウォーク

6月11日

東京富岡八幡宮

□惜別 渡部健三さん

昨秋霜月 傘寿のご挨拶！

総会にはいつもお顔があり親しくお話ができました。「ここ北東北の空は澄んでいて、雲のない夜には星の瞬きを見ることが出来ます。：星たちもまた、伊能隊のすべてを見ていたにちがいありません。：たとえば一〇〇光年の彼方に輝く星を見つめることにしましょう。：」と残されました。すばらしい研究者でした。ご冥福をお祈りします。



□富岡八幡宮「スケッチ七景」



深川八幡さまに登場。原画・伊能洋氏の手刷シルクスクリーン版画です。

□佐原歴史散歩・初春は難めぐり

国指定史跡の忠敬旧宅に、江戸明治期の民家や商家が軒を連ねる佐原は町をあげて「佐原まちづくり博物館」に取り組んでいる。

運営は商店のおかみさんたちが集まった「おかみさん会」の手で行われており、忠敬記念館の館長や学芸員もおかみさんの一員。二月から三月なかばまで、記念館の企画展は「難めぐり」。町では各家に伝わる歴史のある雛人形を店内に飾って見て頂くというもので、ひと足早い佐原の春を満喫しませんか。



お知らせ

□新入会員のみなさんです。どうぞよろしく。

辻本 元博さん 大阪府堺市

国際地図学会会員

西原 俊基さん 愛媛県西条市

元西条市立神戸公民館長

□新年度会費のお願い

払込書を同封致します。なお、四月から払込手数料が改定されます。ATMの60円変更ませんが、窓口では1万円まで70円が100円に、1万円超は120円が150円です。ご容赦の程。

□旅行のご案内



「長崎奉行・河野権右衛門様、ご出座」と昨秋オープンした長崎歴史文化博物館から聞こえてくるそうです。お誘い合せのうえ、ご参加をお待ちします。どうぞご期待下さい。

○日時 5月21日(日)〜23日(火)

○行先 長崎県平戸から長崎市周辺

21日羽田ー福岡空港ー九州自動車道ー平戸

ホテル旗松亭泊

22日平戸ー佐世保ー長崎自動車道ー長崎

全日空グランドホテル泊

23日長崎フリータイムー長崎空港ー羽田

○探訪 松浦史料博物館・西海海路図他

長崎歴史博物館・大村藩写真図他

○催事 平戸探索 長崎さるく 西海悠々

「さるく」とは、まちをぶらぶら歩くという意味の長崎弁です。まち歩き博覧会が開催中。出島はこの春往時のまちなみが甦る。

○費用 東京発 七万三千元(予定)

○参加申込と資料請求 一報をお願いいたします。ハガキ、メール、FAXで。

雪は土日、平日午後6時以降

0424・24・4568 福田まで。

要望、情報、アドバイスを聞かせ下さい。

○旅行の詳細は決定次第ご案内いたします。

○訂正 42号

「詩人みいたな木」31頁下段、蘭々を蕭々に。

みたまねむる 碑 覆ふガジュマルの

梢 蕭々と鳴る摩文仁の丘に

「良助の次男榎本武揚」49頁上段、

武揚より姉への手紙二行目

「懂」を、「健」に。お詫びして訂正します。

○石川さんのクイズ回答 出題は41頁

①きびな②とびうお いかででしたか？

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどこでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回 64頁

―予定―

第44号 締切 3月末 発行 5月

②例会・見学会の開催

第45号 締切 6月末 発行 8月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第46号 締切 9月末 発行 11月

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万元を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合、は、当該年度のバックナンバーをお送りします。

⑤ (04年8月事務所は新宿区下宮比町から移転)

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel

03-3466-9752

事務局メール fuku-inh@j9so-net.ne.jp

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、FD、CDなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行(400字詰用紙4枚分)、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等(返却します)添付可。
話題、各種情報、近況などお便りをお待ちしています。

伊能忠敬研究会のホームページ

ホームページは秋葉武晃さんが担当しています。

<http://inoh-tadataka.org/>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事です。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図、会報の話題など御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.tcin.or.jp/koko>

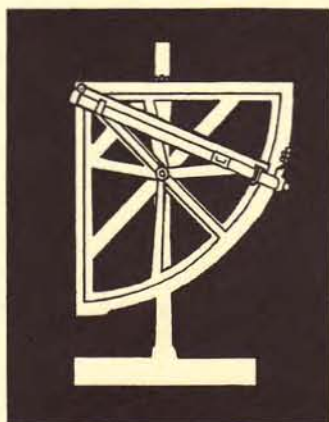
編集後記

今年は大宰府の飛梅も開花が遅いようです。大雪に遭われた皆様にはお見舞い申し上げます。雪が消えるまでご苦労さまです◇隣家の木から早朝よく鳥の鳴き声が聞こえてきます。季節ごとに違う声も。都会では野鳥減少といわれていますが自然が戻る傾向も。荒川河畔の昨年暮れは暖冬模様。だが鴨は昨年以上の数でした。こんなに暖かいのに？だがその後は寒い冬。鳥たちは自然界の動きに先行判断のコンパスが標準装備？◇初夢です。以前「北方領土展望台」望遠鏡では国後島の白樺の木立が眼前に。忠敬さんはなぜ別海で測量を断念したのか。「世界地図がその脳裏にあったのだからこれ以上歩を進めると千島へ行ってしまう日本全図が作れなくなる。ここが潮時、江戸へ気持ちよく退き帰えそう」夢の真相は岩下明祐著「北方領土問題」のせいです◇小学生が風力発電用風車と老人ホームの新しい地図記号を作りました。昨年内府書陵部で見た「日本国地理測量之図」では赤青黄緑色の地図合印が記号凡例。地図記号から忠敬さんにも関心が広がればうれしいことです◇山の三月、動き出す新しい春に心呼吸です。多謝(F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.43 2006



Special News

"The List of Documents about Tadataka" has been Completed
Press Conference "Large-Scale Inoh Maps""Setagaya Document"

Editorial Department 1
4

Topics

Report of the Annual Meeting in Surugadai
Sohke Document back to Kyusyu National Museum
Place Names Related to the Year of the Dog
"Tadanori's Star Map", as Another Inoh Map

Maeda Kohko 6
Editorial Department 10
Saitoh Hitoshi 11
Ogiwara Tetuo 12

Regional Materials

Documents about Inoh Survey Team Passing through Mie
Inoh's Survey in Echigo Iwafune
from "Yosoeemon's Memorandum"(1)

Mie Prefecture 18
Kazama Hirokichi 26

Early Spring Topics

Attempt of International Maps
Simenawa in Shibata
Composing a Poem on Spring Mt Funagata
Closure of the Inoh Society's Former Homepage
Search for the Footsteps of Tadataka in Saitama Prefecture
Sakabe Teibe's and Remains of Kentohahi

Tujimoto Motohiro 33
Ohtomo Masamichi 35
Takegawa Yoshio 35
Ohtomo Masamichi 36
Kato Kohji 38
Ishikawa Seichi 40

Articles

Walk along Tadataka's Route in Miura Peninsula
"Oranda Fusetsu-sho" :an Anecdote about the List of Tadataka
Hakoda Ryosuke's Second Son:Enomoto Takeaki (2)
The Pledge between Inoh Tadataka and Kuboki Sei'en (2)

Shirane Sadao 42
Ando Yukiko 49
Itoh Eiko 56
Sakuma Tatuo 63

Meeting Room

Please Come to Mito in Spring !
Essay in Idleness:Inoh Maps and Takami Senseki
Publications received: *"Tadataka Inoh as a Pioneer of Culture"*
"Inquiring the History of Ota Ward"

Kawakami Kiyoshi 69
Yamamoto Kimiyuki 70
71

Information "Travel Guide"

Editorial Department 72

Edited and Published

by

THE INOH TADATAKA SOCIETY